那覇市文化財調査報告書第 101 集

壺屋古窯群 V

―新垣家住宅防災施設等事業に伴う東ヌ窯跡緊急発掘調査―

2015 年（平成 27 年）3 月

那覇市

壺屋古窯群 V

―新垣家住宅防災施設等事業に伴う東ヌ窯跡緊急発掘調査―

巻首図版１

１段目左：東ヌ窯の遠景　　１段目右：調査状況
２段目左：東ヌ窯の近景　　２段目右：調査状況
３段目左：東ヌ窯の後背　　３段目右：３－え　南壁
４段目左：東ヌ窯の後背　　４段目右：３－う　南壁

巻首図版 2

１段目左：３－え　南壁（近景）
２段目左：３－う　南壁
３段目左：３－え　南壁
４段目左：３－え　西壁

１段目右：３－え　西壁
２段目右：３－え　南壁
３段目右：物原の出土状況
４段目右：物原の出土状況

序

本書は、平成24年に行いました、国指定有形文化財「新垣家住宅」における環境保全事業に伴う緊急発掘調査の成果報告書であります。発掘調査は、新垣家地内に存する「東ヌ窯跡」の後背地の擁壁工事に伴う箇所を対象に実施しました。

新垣家の「東ヌ窯跡」は、沖縄の焼き物の施釉陶器（ジョウヤキ）の窯として全国に周知された連房式の登り窯でありますが、その全体像については不明な部分が数多くあります。例えば、いつ頃から窯として操業していたのか、操業以前はどのような状況であったのかなどです。また、焼き物を焼成する部屋は現行では9室ですが、戦前は11室あったとのことです。今回の調査おいて、失われた10・11室の検出が期待されましたが、残念ながら確認されませんでした。それでも、東ヌ窯で生産された焼き物・失敗品・窯道具などが大量に出土しました。さらに、壺屋焼より1時期古いといわれる灰釉碗なども得られ、沖縄の陶器研究に寄与する成果を提供したものと思います。

以上のように、本報告では、琉球王府時代から沖縄の陶器生産に重要な役割を担った壺屋焼の一端を報告することができました。

末尾になりましたが、調査に際してご協力いただいた関係者の方々に深く感謝するとともに、本報告書が文化財保護思想の高揚、ならびに学術研究の一助ともなれば幸いに存じます。

2015（平成27年）3月

那覇市長　**城　間　幹　子**

例　言

1. 本書は那覇市教育委員会が国･県の補助を受けて平成 24 から 26 年度に実施した 「東ヌ窯跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。

2. 発掘調査は「新垣家住宅防災施設等工事」に伴うもので、平成 24 年度において那覇市教育委員会生涯学習部文化財課が実施した。平成 25・26 年度の資料整理・報告書作成は組織改正が行われたため那覇市市民文化部文化財課で行った。

3. 編集・執筆は国吉真由美氏の協力を得て、島　弘が行った。

4. 第 1 図 国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。

5. 第 2 図は嘉手納徳氏の那覇市読史地図を複製した。

6. 出土した資料については、すべて那覇市市民文化部文化財課で保管している。

報　告　書　抄　録

ふりがな	つぼやこようぐん
書名	壺屋古窯群Ⅴ
副書名	新垣家住宅防災施設等事業に伴う緊急発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第101集
編著者名	島弘
編集機関	那覇市市民文化部文化財課
所在地	〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1　TEL 098-917-3501
発行年月日	西暦　2015年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
つぼやこようぐん 壺屋古窯群	おきなわけん 沖縄県 なはし 那覇市 つぼや 壺屋	47201		26度 12分 45秒	127度 41分 35秒	2012. 7 ～ 2012. 8	40	新垣家住宅防災施設整備等事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
壺屋古窯群	生産遺跡	18世紀 ～ 20世紀		沖縄産陶器 瓦 銭貨 等	東ヌ窯跡で生産された器物が大量に得られた。

目　　次

巻首図版
序
例言
報告書抄録
第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯と経過 …… 1
第１節　調査体制及び成果の記録 …… 1

第Ⅱ章 調査の概要 …… 5
第Ⅲ章 層序 …… 5
第Ⅳ章 出土遺物 …… 6
第１節　施釉陶器（ジョウヤキ） …… 6
第２節　無釉陶器（アラヤキ） …… 15
第３節　陶質土器（アカモノ） …… 26
第４節　窯道具 …… 29
第５節　瓦 …… 40
第６節　本土産陶磁器 …… 42
第７節　銭貨 …… 42
第Ⅴ章　まとめ …… 43

挿図目次

第 1 図　那覇市内の古窯分布図
第 2 図　那覇読史地図（明治初年頃の那覇）
　　那覇市壺屋地区の区割図
第 3 図　壺屋古窯群の分布図
第 4 図　調査位置図
　　新垣家配置図 …… 2
第 5 図　グリッド設定と層序 …… 3
第 6 図　施釉陶器：碗 …… 9
第 7 図　施釉陶器：碗 …… 10
第 8 図　施釉陶器：碗 …… 11
第 9 図　施釉陶器：鍋の蓋・鍋 …… 13
第 10 図　施釉陶器：水注・花瓶 …… 12
第 11 図　施釉陶器：煙管・灯明皿・灯明具・
　　炉・香炉 …… 14
第 12 図　無釉陶器：鉢 …… 18
第 13 図　無釉陶器：水鉢 …… 19
第 14 図　無釉陶器：甕 …… 20
第 15 図　無釉陶器：擂鉢 …… 21
第 16 図　無釉陶器：皿 …… 22
第 17 図　無釉陶器：水注・片口 …… 23
第 18 図　無釉陶器：鉢・徳利・壺 …… 24
第 19 図　無釉陶器：蔵骨器・蓋・炉・土錘・
　　陶製品 …… 25
第 20 図　陶質土器：炉 …… 27
第 21 図　陶質土器：鍋・皿・脚台付き皿・蓋
　　先島諸島の土器：底部 …… 28
第 22 図　窯道具：円形ハマ …… 33
第 23 図　窯道具：抉り入りハマ …… 34
第 24 図　窯道具：筒状のトチン …… 35
第 25 図　窯道具：中空のトチン・サヤ …… 36

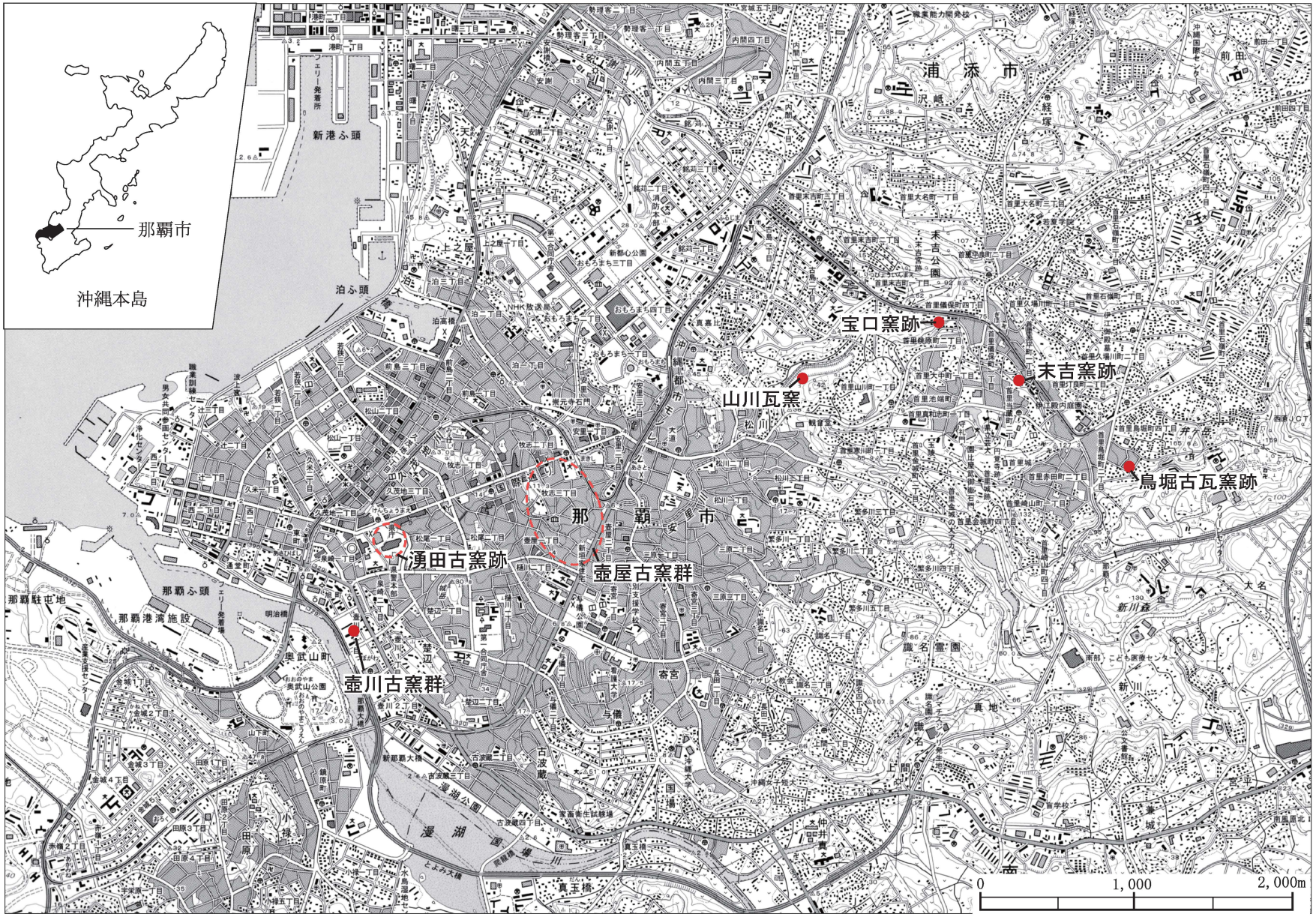
第 26 図　窯道具：円柱状製品 …… 37
第 27 図　窯道具：中空のハマ・
桶胴形のハマ …… 38
第 28 図　窯道具：タナイタ・タナボウ… 39
第 29 図　瓦：丸瓦・平瓦…… 41
第 30 図　銭貨…… 42
第 31 図　本土産陶器：擂鉢…… 42

表目次

第 1 表　出土一覧……4
第 2 表　施釉陶器　観察一覧……7
第 3 表　施釉陶器　観察一覧……8
第 4 表　無釉陶器　観察一覧…… 16
第 5 表　無釉陶器　観察一覧…… 17
第 6 表　陶質土器　観察一覧…… 26
第 7 表　窯道具　観察一覧…… 30 ～ 32
第 8 表　瓦　観察一覧 …… 40

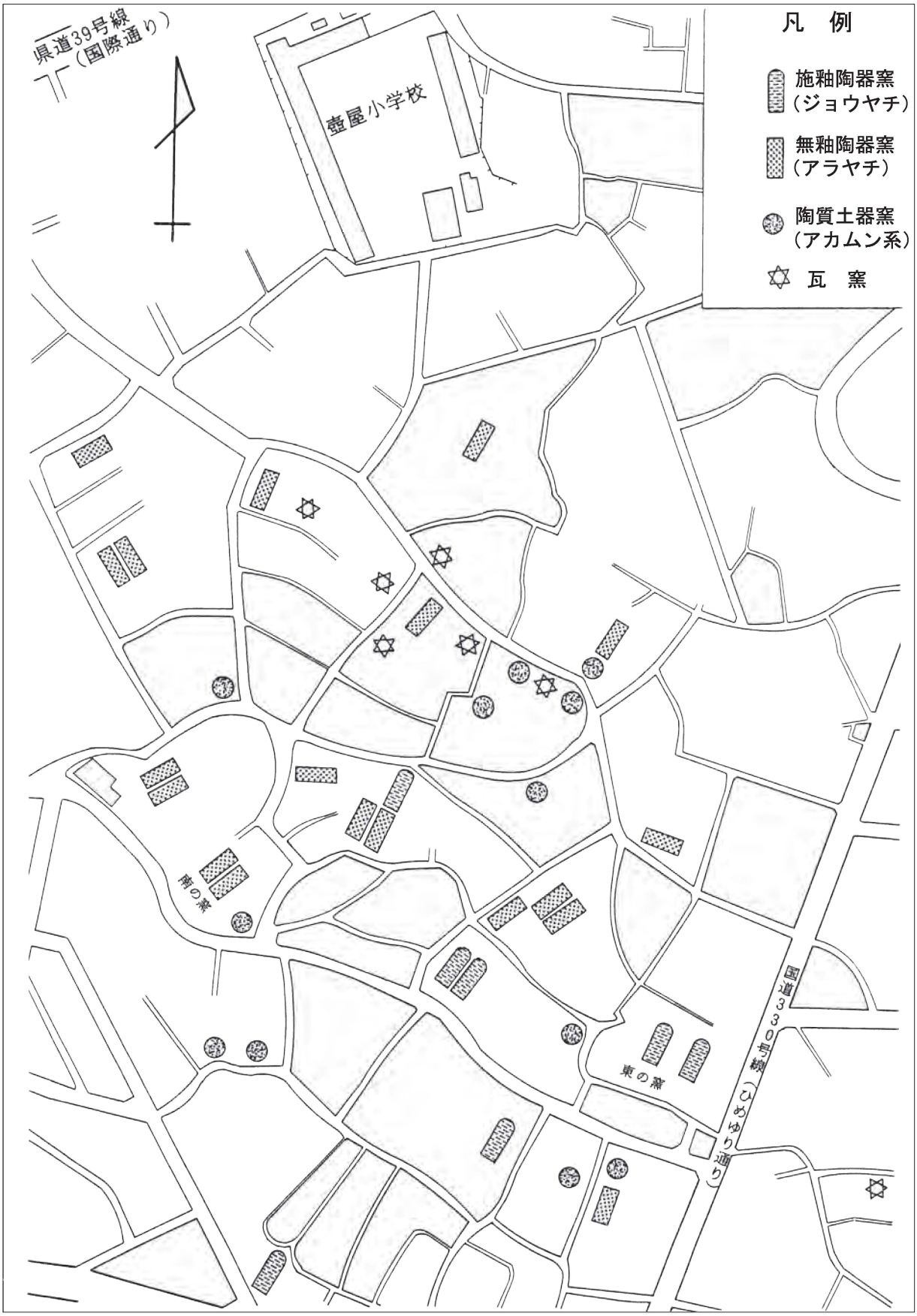
図版目次

巻首図版 1
巻首図版 2
図版 3　施釉陶器：碗
図版 4　施釉陶器：碗
図版 5　施釉陶器：碗
図版 6　施釉陶器：鍋の蓋・鍋
図版 7　施釉陶器：水注・花瓶
図版 8　施釉陶器：煙管・灯明皿・灯明具・
炉・香炉
図版 9　無釉陶器：鉢
図版 10　無釉陶器：水鉢
図版 11　無釉陶器：甕
図版 12　無釉陶器：擂鉢
図版 13　無釉陶器：皿
図版 14　無釉陶器：水注・片口
図版 15　無釉陶器：鉢・徳利・壺
図版 16　無釉陶器：蔵骨器・蓋・炉・土錘・
陶製品
図版 17　陶質土器：炉
図版 18　陶質土器：鍋・皿・脚台付き皿・蓋
先島諸島の土器：底部
図版 19　窯道具：円形ハマ
図版 20　窯道具：抉り入りハマ
図版 21　窯道具：筒状のトチン
図版 22　窯道具：中空のトチン・サヤ
図版 23　窯道具：円柱状製品
図版 24　窯道具：中空のハマ・桶胴形のハマ
図版 25　窯道具：タナイタ・タナボウ
図版 26　瓦 : 丸瓦・平瓦
図版 27　銭貨
図版 28　本土産陶器



第１図　那覇市内の古窯分布図

第２図　上：那覇読史地図（明治初年頃の那覇）
下：那覇市壺屋地区の区割図（赤：今回の調査地区、黒：既存の調査地区）



第３図　壺屋古窯群の分布図（明治～昭和初期）

第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯と経過

国指定建造物「新垣家住宅防災施設等（環境保全）事業」として、北側擁壁工事が予定されていた。工事予定地が東ヌ窯の後背地にあたるため、平成 24 年 6 月に試掘調査を実施した。調査の結果、沖縄産陶器・窯道具・窯壁などが大量に含む層が確認されたため、引き続き 7・8 月にかけて緊急発掘調査を行った。

第 1 節　調査体制及び成果の記録

平成 25 年度において那覇市教育委員会生涯学習部文化財課は、那覇市市民文化部へ組織改正が成された。平成 24 年度は那覇市教育委員会で事業を行い、平成 25･26 年度は市民文化部において実施した。以下、年度毎の調査体制を示す。

平成 24 年度

事業主体	那覇市教育委員会		教育長	城間　幹子
事業所管	〃	文化財課	課長	古塚　達朗
事業総括	〃	〃	副参事	島　弘
調査事務	〃	〃	主査	會澤　一大
〃	〃	〃	主任主事	瑞慶山由香里
調査員	〃	〃	専門員	知念　政樹

調査作業員

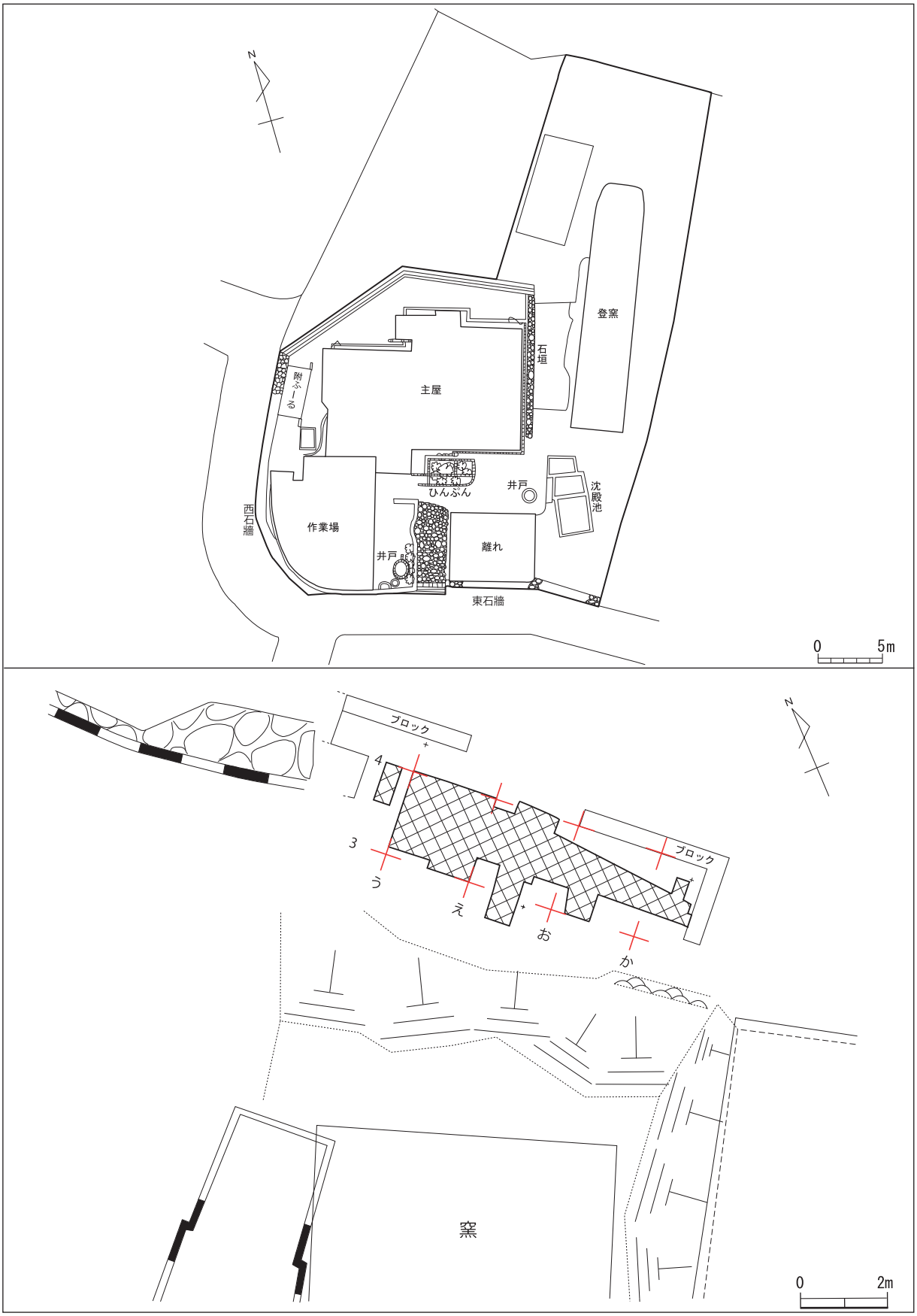
上江州由昇・加納立己・山田真彦・長堂嘉尚

平成 25・26 年度

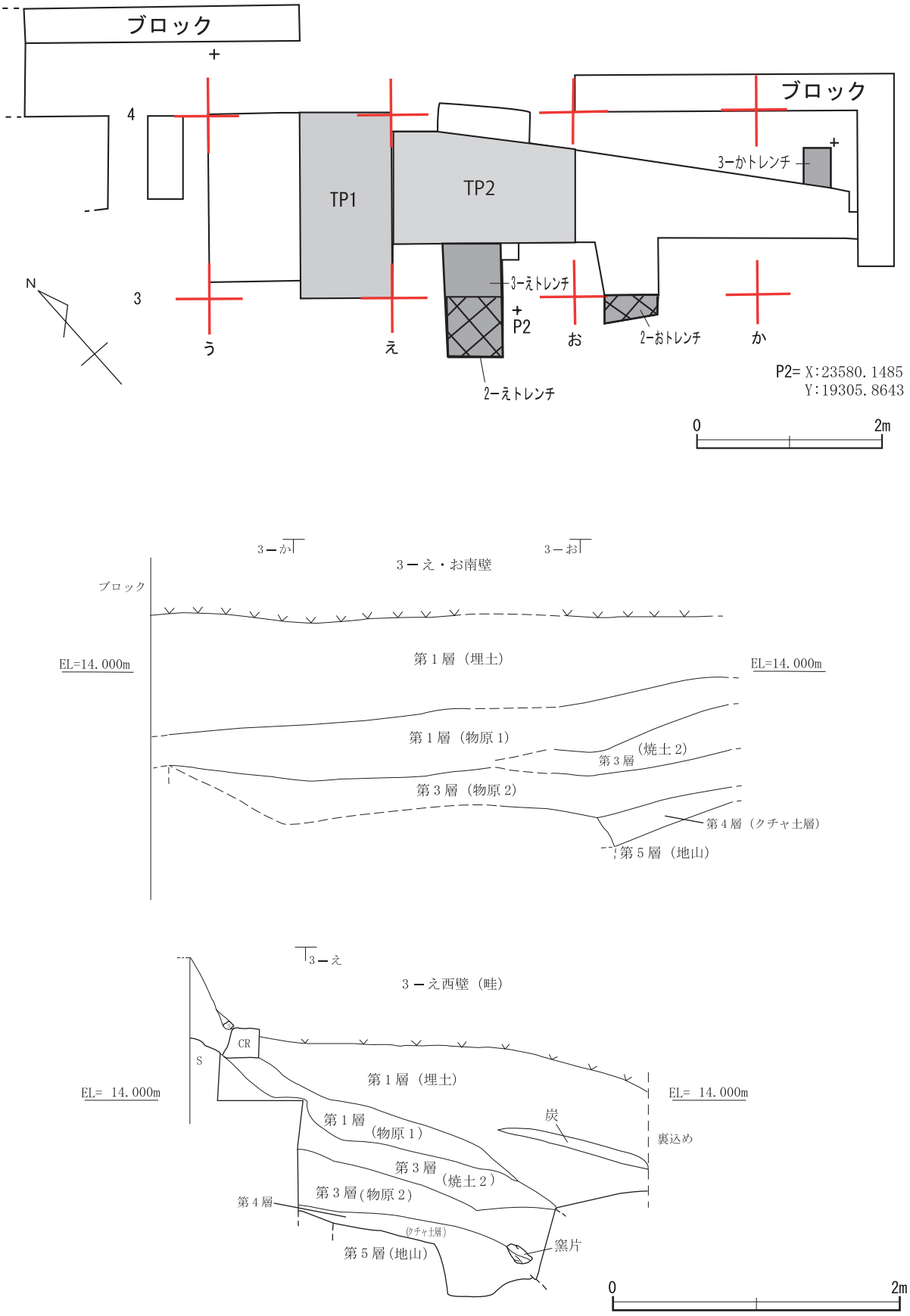
事業主体	那覇市		市長	翁長　雄志
〃	〃		〃	城間　幹子
事業所管	〃	文化財課	課長	古塚　達朗
事業総括	〃	〃	副参事	島　弘
調査事務	〃	〃	主査	新里　清美
〃	〃	〃	主任主事	瑞慶山由香里
調査員	〃	〃	専門員	知念　政樹

資料整理

国吉真由美・西銘定子・豊里加奈子



第４図　上：新垣家配置図
下：調査位置図



第5図　グリッド設定と層序

第１表　出土遺物一覧

層序＼種類		沖縄産施釉陶器																								沖縄産無釉陶器														
		碗	小碗	皿	大鉢	鉢	すり鉢	盃	水注	あんびん	酒器	壺	油壺	瓶	袋物	蓋	鍋	火炉	香炉	灯明皿	灯明具	片口	煙管	蔵骨器の蓋	器種不明	鉢	水鉢	すり鉢	壺	甕	水甕	皿	徳利	水注	酒器	火炉	鍋	土瓶	耳（不明）	蔵骨器	器種不明
１層		259	44	9	17	15	1	1	25	6	6	14	1	6	1	4	3	5			1	2	1	1	6	3	2	19	11	4	3	2	1							10	8
２層		29	7	1	2				2	3		1				4		2			1				1	3		2	1				1							1	
3層上層	i	41	5		4	2			7		1	1				1		1					1			1	1														1
	h	12	1		1				1			1						1											1			1									
	g	14							4			3		1													1														
	f	25	1		2	1			3																1	1															2
	e	17	1			1			1	1		3		2			1																							1	
	c	45	8	2	2	3			3	1	2			1		3		1							1			1													
3層下層	b	20	9	2	3	4						1				2		1	1						3	3		2	1									1			1
	a	303	49	6	5	9			14	2	3	14				13	6	6	2	1	1				8	8	1	6	6	3		1	2	1	1	3				1	10
４層		112	29	2	1	9			12		2				1	2	7	2	1						0	16	1	26	12	6		3	5	1	0	6	1		2	6	6
合計		877	154	22	37	44	1	1	72	13	14	38	1	10	2	29	17	19	4	1	3	2	2	1	20	35	6	56	32	13	3	7	9	2	1	9	1	1	2	19	28

層序＼種類		陶質土器								瓦		円盤状製品		染付	磁器				本土産無釉陶器	銭貨	博・レンガ	石	サンゴ	しっくい	鉄製品	くぎ	土錘	合計
		鍋	鉢	皿	脚台付皿	火炉	土瓶	蓋	不明	平	丸	無釉	施釉	碗	碗	小碗	急須	不明		寛永通寶								
１層		4				3	1	4		9	7	1	3	1	2		1	1		1	1	5	6		8	7		556
２層																							2					63
3層上層	i												1			1					1							70
	h									2	1													1				23
	g									1												1	2	1				28
	f								1	1																		38
	e									1														1				30
	c									1																		74
3層下層	b	2				1				3			1															63
	a	4	2	1	1	4	4	4		3	1		2						1				1				1	514
４層		2	4	3		4	1				2		1						1				2					291
合計		12	6	4	1	12	6	8	1	21	11	1	8	1	2	1	1	1	2	1	2	6	13	3	8	7	1	1750

窯道具出土一覧

層序＼種類		ハマ			円柱状製品	円形ハマ	トチン			サヤ			桶胴形のハマ	円錐形	タナボウ	タナイタ	不明	合計
		無釉	施釉	釉不明			無釉	施釉	釉不明	無釉	施釉	蓋					無釉	
１層		4	3		5	6	32	8	2	4			5	1	7	1		78
２層		1	3		2			1						1				8
3層上層	i	1	3				3	3	2		2							14
	h		1															1
	g																	0
	f		1				1	1				1						4
	e	1						1										2
	c	2					1											3
3層下層	b	1																1
	a	7	5	1			7	6	3	2			1				2	34
４層			4				6	1	4									15
合計		17	20	1	7	6	50	21	11	6	2	1	6	2	7	1	2	160

第Ⅱ章　調査概要

調査は、東ヌ窯跡の背部（約 40m^2）、煙出し部より一段低く削平された平場にテストピット１・２を設け、試掘調査より始めた。その後、前述したとおり本発掘調査に切り替え実施した。グリッド設定は、テストピットをカバーするかたちで２×2m を設定し「3 －お」より調査を開始した（第５図）。表土層より掘削を行うが、夥しい量の陶器片や窯道具・窯壁等が出土し始めた。その後、暫時グリッドを増やし掘り進めた。その間に焼土１・２物原１・２層などが確認された（第５図）。最終的には灰褐色土層の地山（島尻層群）を含めた５層が確認された。ちなみに、窯・ピット等の遺構は検出されなかった。以下、層序について特徴的なことを略述するが、下図に模式図を作成した。参考されたし。

第Ⅲ章　層序

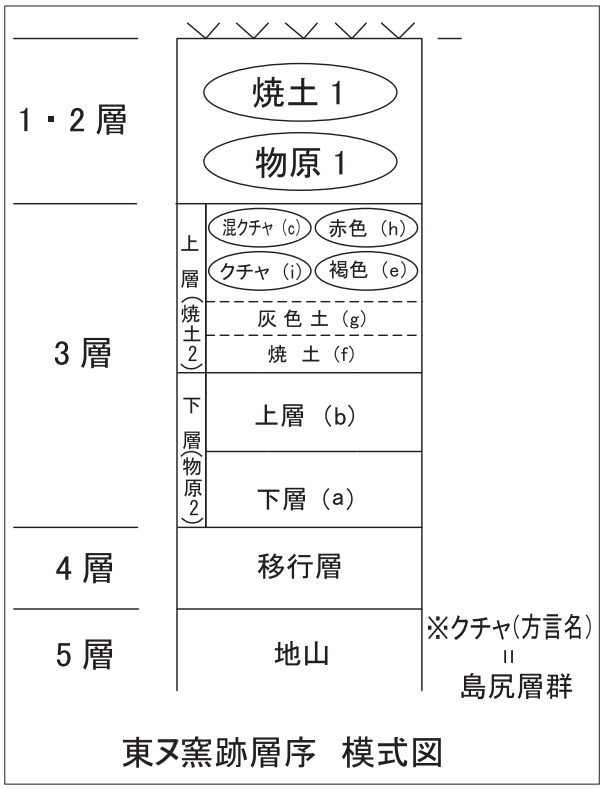
第１層（表土層）：撹乱層で陶器類に混じりビニール等の現代遺物が出土した。遺物の集中する場所は物原１として取り扱った。

第２層（焼土１）：３－う（T・P1）のみで検出された。第１層にレンズ状に堆積した焼土層である。第２層と取り扱った。

第３層（焼土２）：（物原２）　大量に沖縄産陶器片が堆積した層で、陶器間に空間（隙間）が見られた。そのことより短期間に破棄されたものと思われた。本層は上層と下層に分けられ、さらに、上層の下部は焼土（f）その上の灰色土（g）、褐色土（e）混クチャ（c）、赤色（h）、褐色土（i）などが混在して見られた。
下層は物原２の層で上層（b）炭粒を多く含みサラサラした層である。下層（a）は遺物を多く含む層である。

第４層（移行層）：灰褐色粘土層（上層）いわゆる地山への移行層。遺物の出土が見られた。

第５層（地山）　：灰褐色粘土層（島尻層群）



東ヌ窯跡層序　模式図

第Ⅳ章　出土遺物

第１表に示したとおり、小範囲の調査であったが大量の遺物が得られた。コンテナ（60×40 × 15cm 程度）で約 50 箱が得られた。主に、人工遺物で自然遺物は希少であった。ここでは、「壺屋古窯群Ⅰ[註1]」の分類に参考に報告をする。以下、施釉陶器（ジョウヤキ）より報告する。

第１節　施釉陶器（ジョウヤキ）

器種としては、碗・鉢・水注などが得られた。個々の観察は第２・３表に示した。以下、器種別に略述する。

碗（第６～８図）

第６図１～４、第７図９～ 12 に示したものは、いわゆる「湧田碗」と呼ばれている一群である。灰釉を単掛け（フィガキー）したもので、高台部は無釉となる。10・11 は、９個以上の碗が溶着した資料である。12 は口縁部が破損したもので、再度口唇部を成形し皿状にしたものである。取り敢えず本項で扱う。5・6 は掛け分けのもので、内面を灰釉、外面を 5 は黒釉・6 は褐釉のものである。7・8 は透明釉を総掛けしたもので、見込みを蛇の目釉剥ぎ、畳付けを露胎にしたものである。全体的に淡い黄白色を呈する。

第８図のものは、淡い黄褐色の素地に白化粧土を施し、呉須で文様を描く壺屋の焼物である。15・16 は清朝磁器の写したもの。17 は沈線で草花文を描く碗の溶着資料。

鍋（第９図１～５）

1・2 は蓋で 1 は内湾状、2 はやや外反気味に開くものである。3 ～ 5 は身に部分で、3・4 は「く」の字のものである。5 は蓋受け部を階段状につくるものである。

水注（第 10 図１～３）・花瓶（第 10 図４）

1 は胴部に幾何学的な文様を描くもので、底面には脚が付く。2 は内面には釉薬は見られないもの、3 は飴釉と灰釉を掛け分けたものである。2 点とも碗片の溶着が見られ、窯積めの際、最上部に置かれたものと思われた。また、3 には灰釉碗片の溶着が見られ注目された。肩部には注ぎ口が見られるが、身には孔が穿たれていない。4 は肩部に膨らみを持たせ、頸部をやや直に立ち上げる耳付きの花瓶である。

煙管・灯明具・炉等（第 11 図１～７）

1・2 は煙管の吸い口で、1 は透明釉を施したもので、口部付近に窯着物が付着。2 は釉薬が施されてなく焼成されたものである。表面に指頭によると思われる調整痕が僅かに観察される。3 は灯明皿で、口縁部～内面にかけて褐釉が施されたもので、見込みと外面は露胎。また、見込み付近では、細かい石英などの溶着物が顕著に付着。4 も灯明具で「平仄」と呼ばれているものである。4 は直口の炉で、器表面に細かい筋状の文様を斜めに巡らす。口唇部には白土が残る。6・7 は袴腰の香炉で、6 が銅緑釉、7 が白化粧土を施し透明釉を掛け淡い緑色を呈する。

第２表　施釉陶器　観察一覧

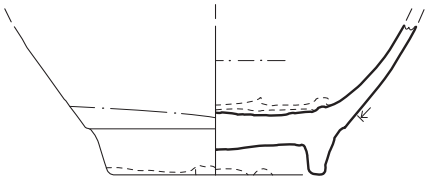
単位：cm

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 器高 底径	素地	特徴	出土地点
第６図　１ 図版３の　１	碗	－ － 5.7	灰褐色で 微粒子	見込みと畳付けに泥状化した白色砂粒が残る。	３え ４層
〃　２ 〃　２	〃	－ － 5.9	淡灰褐色で 微粒子	見込みと高台に残る溶着痕などは、丁寧に処理し仕上げている。	３え・お ４層
〃　３ 〃　３	〃	－ － 6.0	灰褐色で 微粒子	１とほぼ同じ。	３う ４層
〃　４ 〃　４	〃	－ － 6.2	〃	泥状の砂粒が畳付けや見込み内や高台内に付着。 部全体には光沢のある淡い褐釉が見られる。	３う ４層
〃　５ 〃　５	〃	－ － 5.8	淡黄土色で 粗粒子	見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台は露胎。 畳付けと見込みには、白土が付着。 内面は灰釉・外面は黒釉の掛け分け。	３う ４層
〃　６ 〃　６	〃	－ 6.0 －	〃	〃 見込みには灰釉下に飴釉の丸文を施す。 内面は灰釉・外面は褐釉の掛け分け。	〃
〃　７ 〃　７	〃	－ － 5.4	白色 微粒子	見込みは蛇の目釉剥ぎ。畳付けは露胎。	３う ４層
〃　８ 〃　８	〃	－ － 6.2	灰褐色で 微粒子	〃 見込みと畳付けに泥状化した黄白色砂粒が残る。	３う ４層
第７図　９ 図版４の　９	〃	－ － 6.1	〃	〃	３お し２ 3a 層
〃　10 〃　10	〃	－ － 6.2	〃	〃	２え も１ １層
〃　11 〃　11	〃	－ － 6.2	〃	〃 現行で９ヶの溶着が見られる。	２え も１ １層
〃　12 〃　12	〃	－ － 6.0	〃	見込みと畳付けに泥状化した黄白色砂粒が残る。 腰部には釉薬・砂粒の塊の溶着が見られる。 ２次製品。	３う ４層
第８図 13 図版５の 13	〃	12.4 5.9 5.6	淡黄褐色で 粗粒子	見込みと畳付けに白土が残る。丸文が３ヶ胴部に施されている。	２おトレ２ 3b 層
〃　14 〃　14	〃	－ － 5.8	〃	見込みと畳付けに白土が残る。 葉文と圏線が描かれている。	３え し２も２ 3a 層
〃　15 〃　15	〃	13.4 5.7 5.8	〃	見込みと畳付けに白土が残る。 区画文と雨雲文と圏線を描く。	３う １層
〃　16 〃　16	〃	14.4 － －	〃 微粒子	菊花文と略蓮弁文と圏線で描く。 裏面は繋ぎ文と圏線を描く。	３・４え １層
〃　17 〃　17	〃	12.4 6.0 6.0	灰褐色で 微粒子	沈線で草花文を描き、その上より淡い飴釉を施す。	３え し２も２ 3a 層

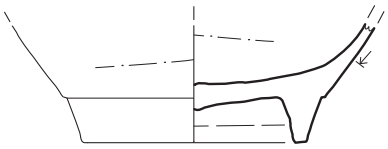
第３表　施釉陶器　観察一覧

単位：cm

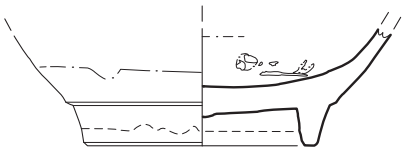
挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 器高 底径	素地	特徴	出土地点
第９図　1 図版６の　1	鍋の蓋	6.0 3.9 12.9	黄褐色 粗粒子	飴釉による付け掛け。見込みと胴下半部は露胎。	２えトレ し２も２ 3a 層
〃　2 〃　2	〃	16.1 4.7 5.7	〃	黒釉を外面と畳付け内面に施す。口唇部に白土が残る。	３う ４層
〃　3 〃　3	鍋	16.9 － －	〃	飴釉を蓋受け部以外に施釉。蓋受け部には泥砂状と細かい繊維状のものが付着。	３え ４層
〃　4 〃　4	〃	15.8 － －	灰褐色で 微粒子	光沢のある飴釉を外面に、内面には灰釉を施釉。蓋受け部は露胎で泥砂状のものと溶着物が残る。	３う ４層
〃　5 〃　5	〃	15.2 8.0 8.4	〃	黒釉と白釉の掛け分け。蓋受け部と胴下半部は露胎。蓋受け部は階段状に成形。	３え し２も２ 3a 層
第10図　1 図版７の　1	水注	－ － 7.0	黄白色 粗粒子	内外面に白釉を施す。底面は露胎。沈線で幾何学的な文様を描く。その上に呉須と淡い飴釉を施釉。底面には別の器物が溶着。	３え ４層
〃　2 〃　2	〃	6.6 － －	〃	黒い飴釉を外面と口部内面に施す。注口に下碗の口縁部が３ヶ溶着。	３う ４層
〃　3 〃　3	〃	6.0 9.7 6.4	灰褐色で 微粒子	飴釉と灰釉を掛け分け。底面は露胎で脚が見られない。注口の身には孔が見られない。また、注口下には碗片が２ヶ溶着が見られる。	３う ４層
〃　4 〃　4	花瓶	－ － 7.8	灰褐色 微粒子	黒色に近い飴釉を施釉。頸部内面と畳付けは露胎。	２えトレ し２も２ 3a 層
第　図　1 図版　の　1	煙管 吸い口	1.4 3.0 －	灰白褐色 微粒子	透明釉を外面のみ施釉。外面に窯着物が付着淡い緑白色を呈する。	３う し２ 3i 層
〃　2 〃　2	〃	1.7 3.0 4.6	〃	釉薬は施されてなく、灰白色を呈する。	３う ４層
〃　3 〃　3	灯明皿	10.7 － －	灰褐色 微粒子	濃い飴釉を口縁部と内面に施釉。石英などの小石が見込み付近付着。	３え 3a 層
〃　4 〃　4	灯明具	4.7 5.0 3.8	淡茶褐色 微粒子	飴釉を施すが、底面と立ち上がりは露胎。 底面には左回転の糸切と孔が見られる。 色調は茶褐色。	２おトレ し２も２ ３層
〃　5 〃　5	炉	16.9 － －	〃	濃い飴釉を施すが、口唇部と内面上端下より露胎。色調は暗茶褐色を呈する。 内面には突起が付く。	３う １層
〃　6 〃　6	香炉	11.5 － －	淡黄褐色 粗粒子	外面には銅緑釉、内面は白土を施釉。胴部には別の器物との剥離痕が見られる。	２えトレ し２ 3b 層
〃　7 〃　7	〃	20.1 － －	灰褐色 微粒子	口唇部内面より外面に白土を塗布後に透明釉を施す。細かい貫入が見られる。表面には溶着物の付着が顕著。色調は淡緑色。	３う ４層



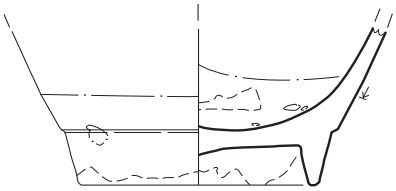
1



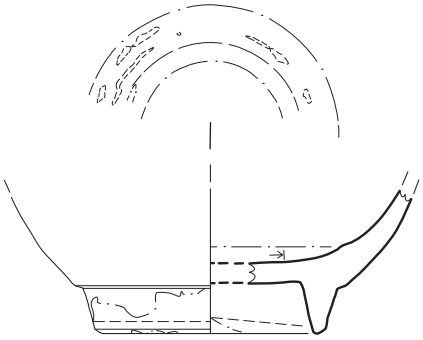
2



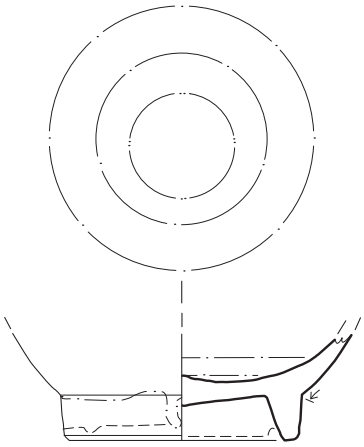
3



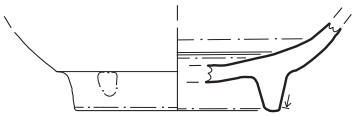
4



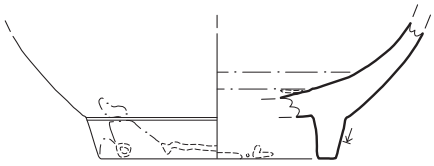
5



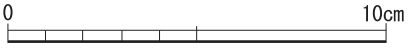
6



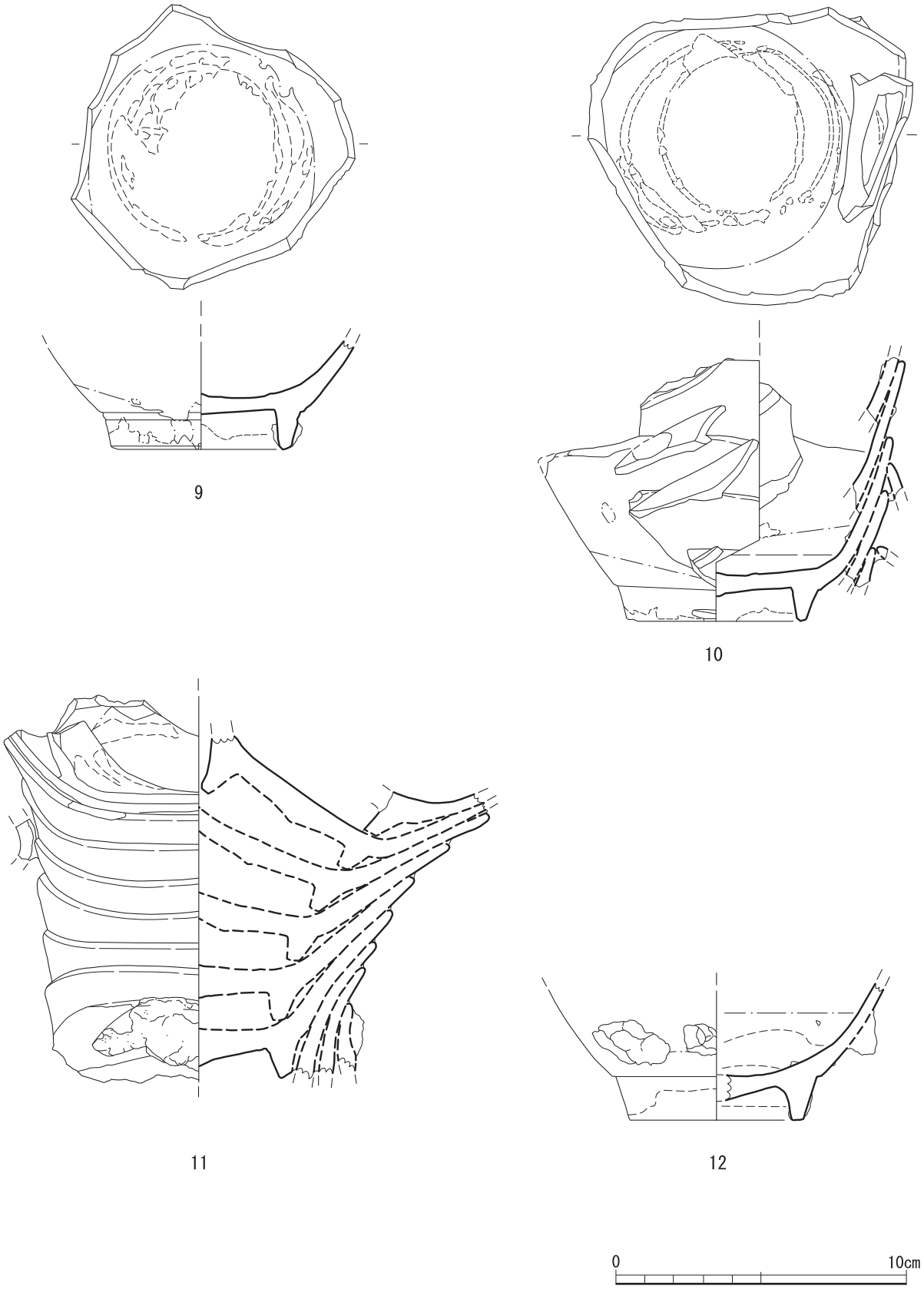
7



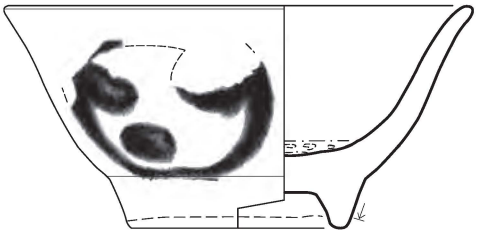
8



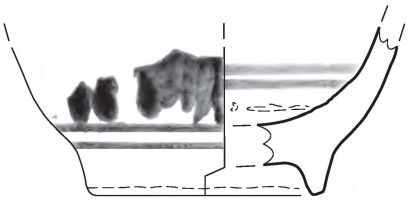
第 6 図(図版 3)　施釉陶器：碗



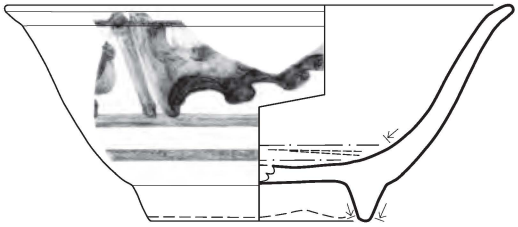
第 7 図(図版 4)　施釉陶器：碗



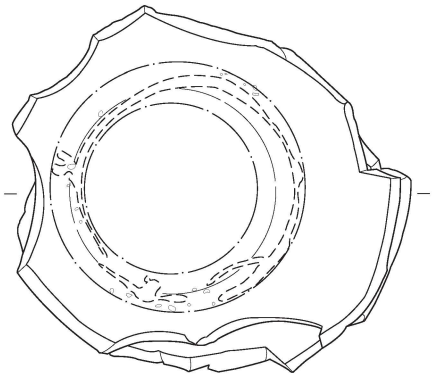
13

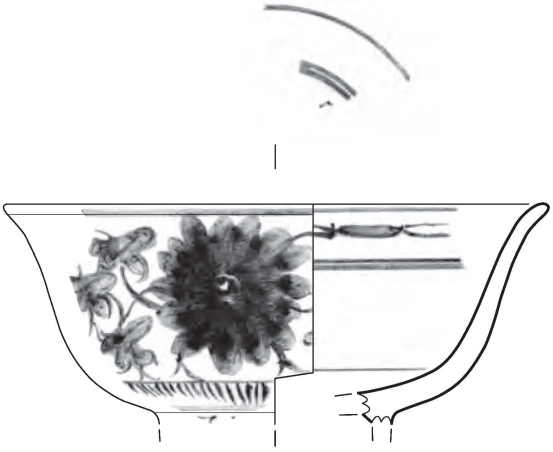


14

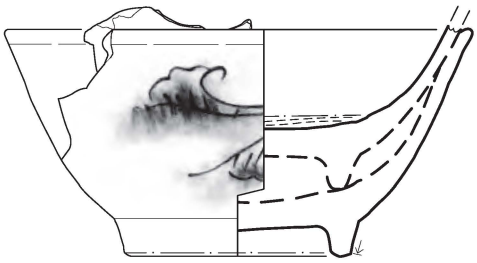


15





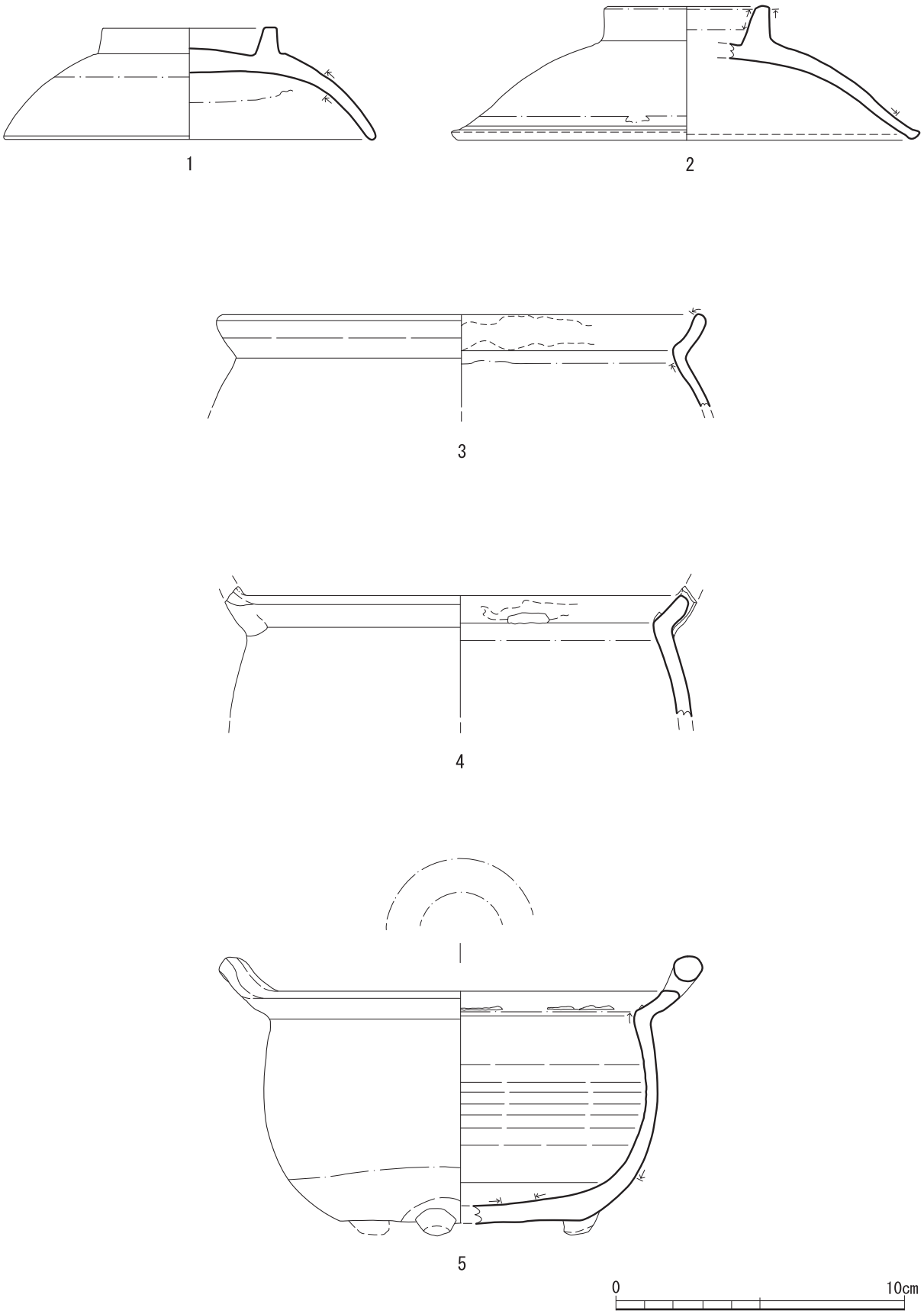
16



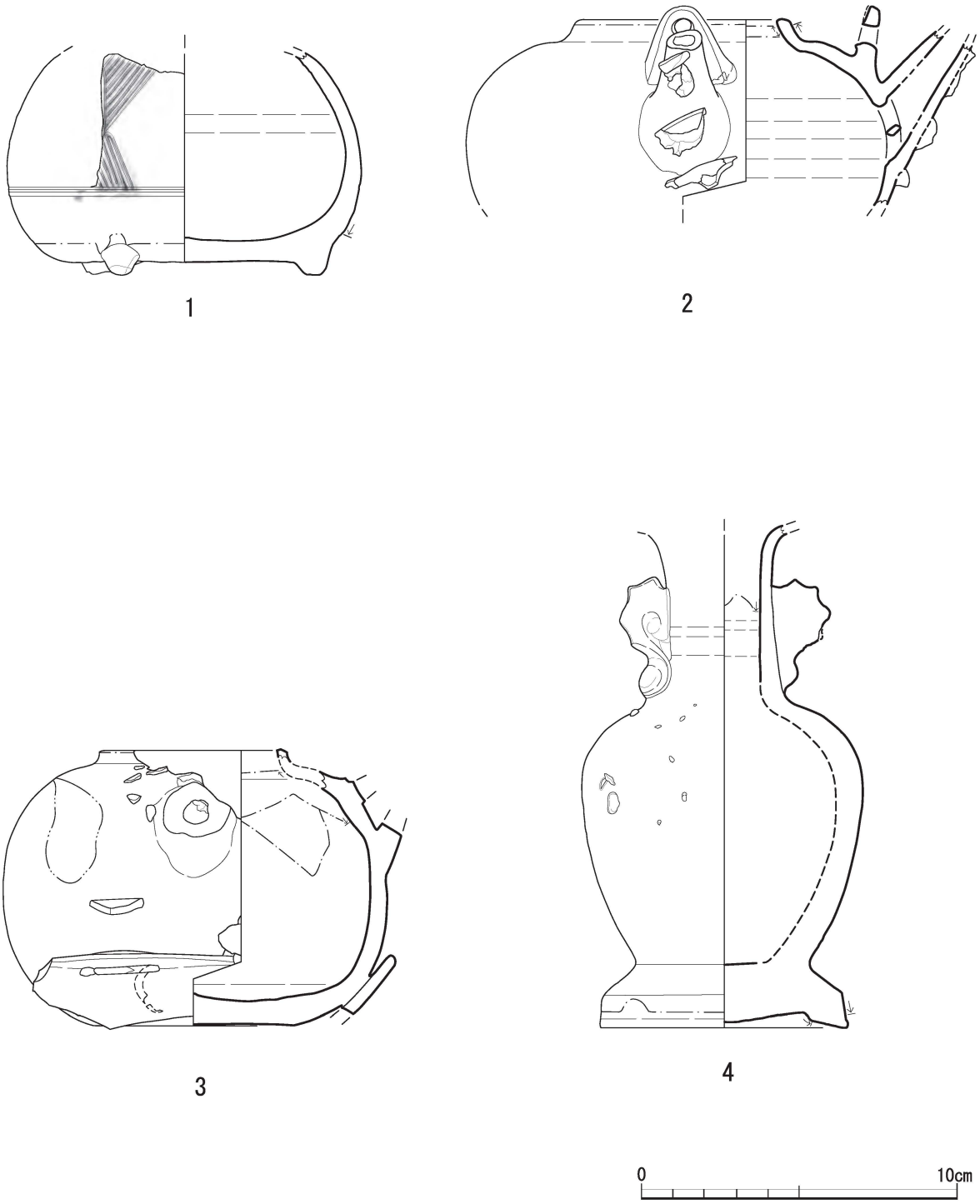
17

0 10cm

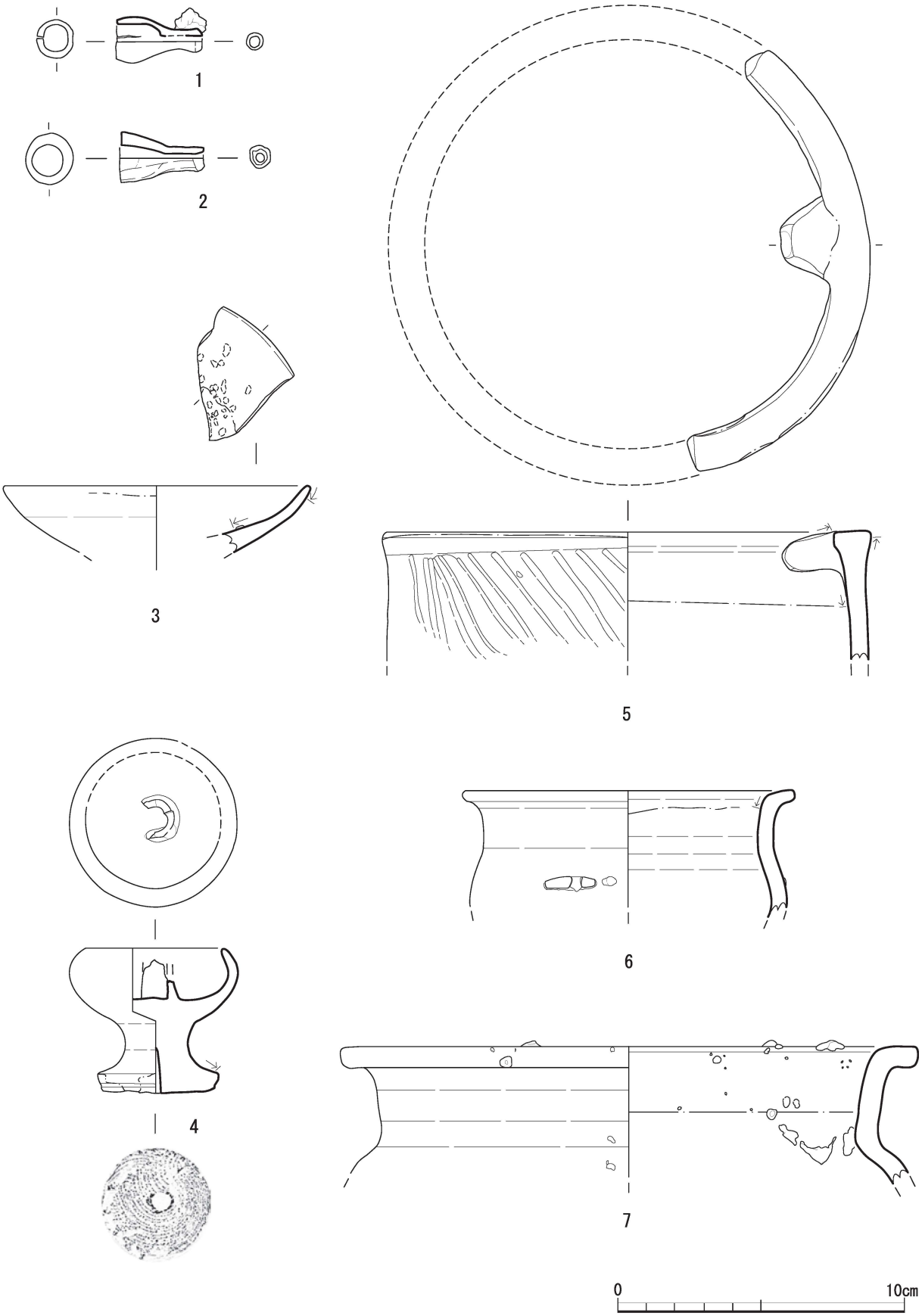
第 8 図(図版 5)　施釉陶器：碗



第 9 図(図版 6)　施釉陶器：鍋の蓋（1・2)、鍋（3 ～ 5)



第 10 図(図版 7)　施釉陶器：水注（1 ～ 3)、花瓶（4)



第 11 図(図版 8)　施釉陶器：煙管（1・2)、灯明皿（3)、灯明具（4)
炉（5)、香炉（6・7)

第２節　無釉陶器（アラヤキ）

器種としては、鉢・壺・蔵骨器などが得られた。個々の観察は第４表に示した。以下、器種別に略述する。

鉢（第 12 図１～３、第 18 図１）**水鉢**（第 13 図４・５）**甕**（第 14 図６・７）

１～３は口縁部を折り曲げるものである。１は短いもので一見蓋のようであるが、今回は取り敢えず鉢に含める。３は大振りの鉢で、液体を貯めるものである。第 18 図１は蓋受け部を持つ鉢で、丁寧な作りのものである。

４･５は内湾器形の水鉢で方言で「ミジクブサー」と呼ばれているものである。５はかなり使用されたものと思われ、全体的に器表面は撫でらかである。

６・７は口唇部を平坦に成形し、やや内湾気味に立ち上げる甕である。文様を凹線と凸帯を巡らし、その間に円文を貼り付けるものである。

摺鉢（第 15 図１～５）

１は口縁部の屈曲が短く､直下に微弱な凸帯を巡らすものである。素地はやや粗めで赤色粒や筋状の赤色が散見できる。２・３は口縁部の逆「L」字状に曲げ強く張り出したもので、素地も暗茶褐色で焼きのよいものである。４･５は底部片で４は平底、５は脚付き底部片である。脚台内には櫛目は施されていない。図版には載せていないが、脚台内に櫛目を施している資料も得られている。

皿（第 16 図１～６）

１は直に開くもので、２・３はやや内湾ぎみのものである。４は口縁部を外反させる。１・２とも薄手で丁寧に作成されたものである。５は平底で箆起し、６は腰部をややくびれ状に立ち上げた平底で、左回転の糸切り痕が残る。見込みに「×」の印刻が観察される。

水注・片口（第 17 図１・２）

１は肩部に把手が付く水注である。２はいわゆる「片口」と称されているものである。

徳利・壺（第 18 図２～６）

２は地元（壺屋）で「ターワカッサー」呼ばれている徳利である。３～６は壺類で､３は短頸の薄手の壺、４は外反のものである。５は頸部を立ち上げ口部を曲げるもので、内面・素地に気泡が散見でき、内外面の色調が異なる失敗品である。６は底部からの立ち上がりに面取りが施されている。器表面には、溶着物に付着が散見できる。

蔵骨器・炉・陶製品（第 19 図１～５）

１に示したものは、無頸蔵骨器（ボージャージーシ）の窓の破片で、暗褐色を呈する。破損面に孔痕が僅か観察される。素地は暗茶褐色の微粒子で砂粒や赤色粒が散見できる。２は台状の摘みを持つ厨子甕の蓋で、焼成の際に笠部が変形したものである。３は炉（ヒールー）で肩部を「く」の字に折り曲げ、その肩部に把手が付く。口縁部には半月状に火窓が施されている。色調は茶褐色で、赤色粒や砂粒・灰色粒が散見できる。口径 12.4cm を計る。１～

3とも「3－えグリッド」の4層より出土。

4は紡錘形の錘で、表面には細かい調整痕が観察される。全長5.8cm、径3.4cm、重さ54.7gのものである。「3－えグリッド」焼土2、3層Cより出土。

5は松カサ状に網目模様を施し、先端に孔が3ヶ見られるものである。全体に淡い暗褐色を呈する。「2－えグリッド」の1層より出土。

第4表　無釉陶器　観察一覧

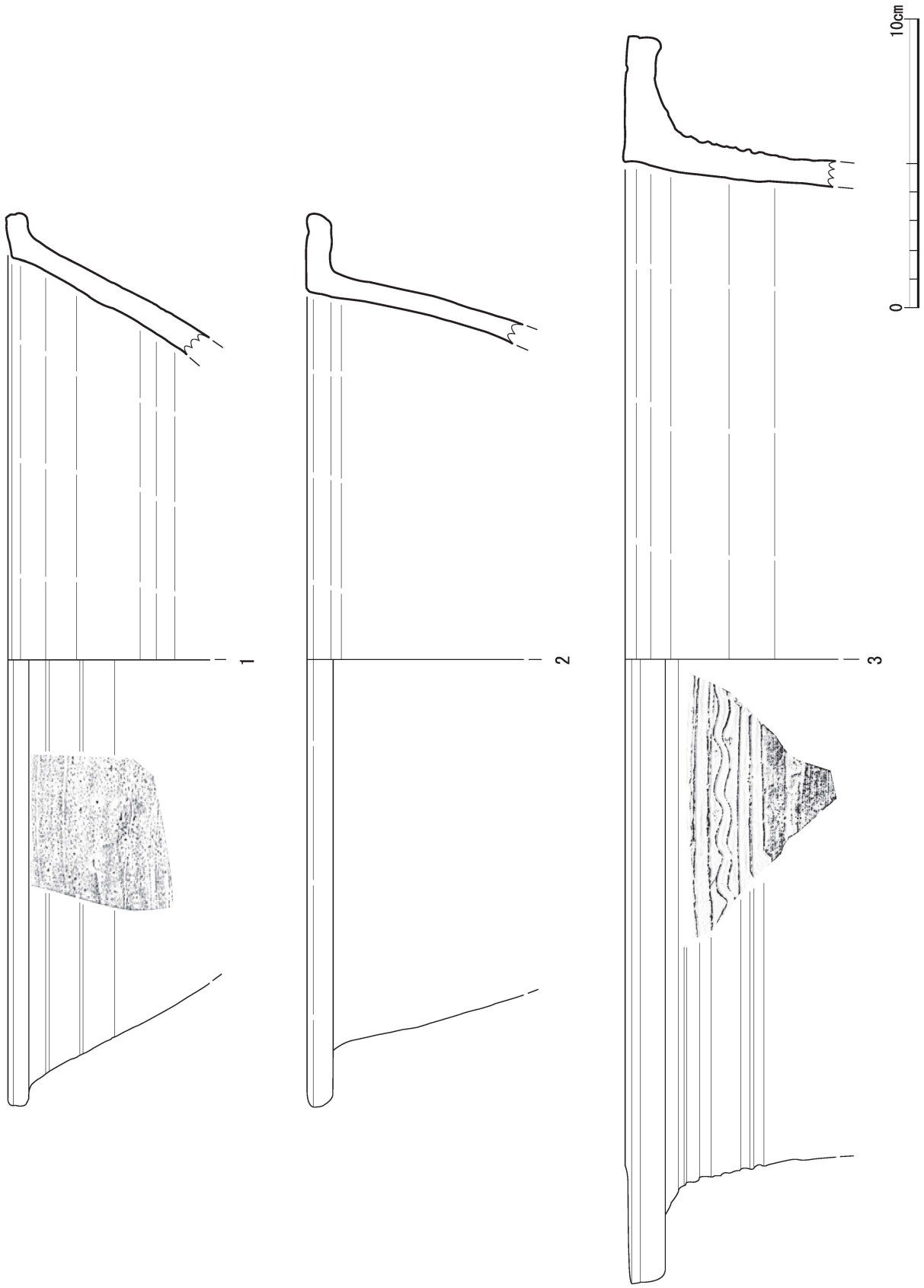
単位：cm

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 器高 底径	素地	色調	特徴	出土地点
第12図　1 図版9の　1	鉢	30.6 － －	茶褐色 微粒子	淡茶褐色	器表面に気泡が見られる。また、器表面には、筋状のロクロ痕が観察される。焼成良好。砂粒が素地に散見できる。	3う 4層
〃　2 〃　2	〃	31.0 － －	橙褐色で 微粒子	橙褐色	やや焼成が弱く、器表面にロクロ痕が見られる。 口唇部に浅い凹線を巡らす。	2おトレ し2も2 3a層
〃　3 〃　3	〃	43.2 － －	〃	〃	器表面にロクロ痕が見られる。焼成良好。 口唇部に浅い凹線を巡らし、肩部には凹線と破線を描く。	3う 4層
第13図　4 図版10の　4	水鉢	19.6 － －	〃	淡茶褐色 橙褐色	肩部に波状文を巡らす。 焼成良好。	2えトレ し2も2 3a層
〃　5 〃　5	〃	30.1 12.1 17.8	茶褐色 微粒子	茶褐色 褐色	腰部あたりまで薄く褐釉を施釉。肩部には凹線と波状文を巡らす。内面には白土が付着。 素地に気泡と茶褐色の粒が散見できる。	3え・お 4層
第14図　6 図版11の　6	甕	－ － －	〃	暗褐色	口縁部に凹線と凸帯文を巡らし、その間に円文を貼り付ける。 裏面に数箇所の打割痕が観察される。 焼成良好。	3え 4層
〃　7 〃　7	〃	39.2 － －	茶褐色 微粒子	茶褐色 褐色	上記と同様の文様を施す。	3う 4層
第15図　1 図版12の　1	擂鉢	32.0 － －	茶褐色 粗粒子	淡茶褐色	素地に赤色粒や赤色の筋が観察される。 擂目は空間を設け、7～9櫛目を擂り上げ、上端部は布で擦り消している。	3え 4層
〃　2 〃　2	〃	24.6 － －	暗褐色で 微粒子	黄暗褐色 茶褐色	擦目は間を設けず密に摺り上げている。 口唇部に浅い凹線を巡らす。	2おトレ し2も2 3a層
〃　3 〃　3	〃	30.8 － －	灰褐色で 茶褐色を サンド	〃	素地に赤色粒・砂粒が散見。焼成良好。 口唇部に浅い凹線を巡らし、肩部には凸線を巡らす。	3う 4層
〃　4 〃　4	〃	－ － 9.8	暗茶褐色 微粒子	暗褐色	櫛目が8本ほどのもので摺り上げている。 底面は箆起しか。	3う し1 2層
〃　5 〃　5	〃	－ － 10.0	淡茶褐色 微粒子	茶褐色	上記と比べて細かい櫛目を使用。脚台内には櫛目はなし。	3う し2 3a層

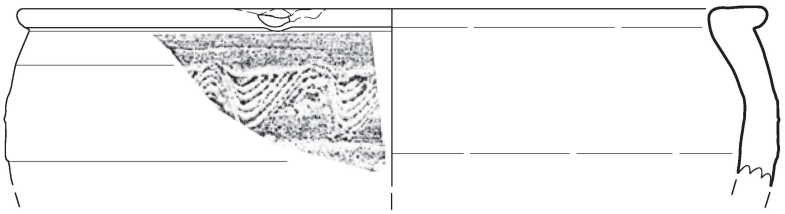
第５表　無釉陶器　観察一覧

単位：cm

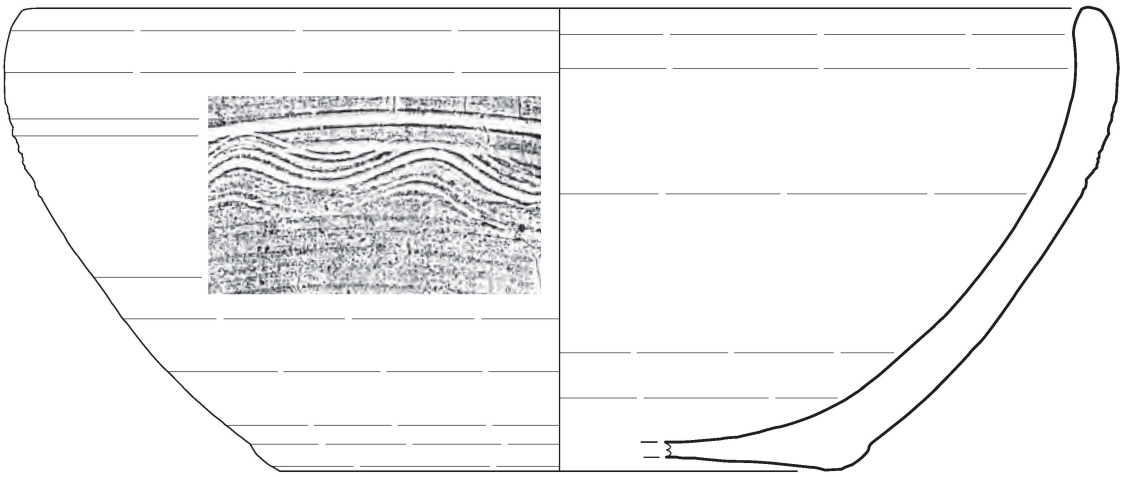
挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 器高 底径	素地	色調	特徴	出土地点
第16図　1 図版13の　1	皿	10.6 － －	明茶褐色 微粒子	淡茶褐色	器壁が大変薄く、焼成良好。 器表面にロクロ痕が観察される。	３え ４層
〃　2 〃　2	〃	10.4 2.2 4.6	灰褐色で 微粒子	〃	やや焼成が弱く、アカモノに近い。 器表面にロクロ痕が見られる。底面は丁寧に調整がみられるが、僅かに糸切痕が観察される。	３う ４層
〃　3 〃　3	〃	11.4 2.3 6.0	茶褐色で 微粒子	茶褐色	器表面にロクロ痕が見られ、焼成良好。 底面は箆起し。	３え３お も１ １層
〃　4 〃　4	〃	12.0 2.7 4.8	〃	淡茶褐色 褐色	〃	３う し２も２ ３ａ層
〃　5 〃　5	〃	－ － 6.2	〃	灰褐色 茶褐色 灰褐色	内面はかなり加熱を受けたものと思われ、小穴が散見できる。底面は箆起し。	３う ４層
〃　6 〃　6	〃	－ － 5.0	橙褐色 微粒子	橙褐色	くびれ平底で、底面に左回転の糸切痕が残る。 見込みに「×」の印刻が見られる。	３う
第17図　1 図版14の　1	水注	9.6 － －	茶褐色 微粒子	淡茶褐色 灰色	器表面には、筋状に調整痕が観察される。 焼成良好。	３う ４層
〃　2 〃　2	片口	－ － 9.4	〃	黄褐色 茶褐色	〃 底面は箆により丁寧調整。	３お ４層
第18図　1 図版15の　1	鉢	18.0 － －	〃	茶褐色 淡い褐色	〃 焼成良好。	３う ４層
〃　2 〃　2	徳利	－ － 7.3	茶褐色 微粒子	茶褐色 灰褐色	底・外面は草木に調整痕、内面はロクロ痕が残る。溶着物が散見できる。 焼成良好。	３え・お ４層
〃　3 〃　3	〃	9.0 － －	〃	〃	器表面にロクロ痕が見られ、焼成良好。 肩部に窯印が観察されるが、判然としない。	３う １層
〃　4 〃　4	〃	14.6 － －	〃	暗褐色 茶褐色	頸部に黒褐色（マンガン？）の釉を帯状に２条巡らす。裏面は横位に布目痕が見られるが頸部付近は掻き上げの調整が顕著に見られる	３う ４層
〃　5 〃　5	〃	18.8 － －	暗褐色 微粒子	黄茶褐色 灰黒褐色	内面や素地に気泡が残った失敗品。 肩部に沈線を３条と細い縄目の凸帯を巡らしている。	〃
〃　6 〃　6	壺？	－ － 8.5	〃	暗褐色 茶褐色	底・外面は草木に調整痕、内面はロクロ痕が残る。溶着物が散見できる。 焼成良好。	３え・お ４層



第 12 図(図版 9)　無釉陶器：鉢

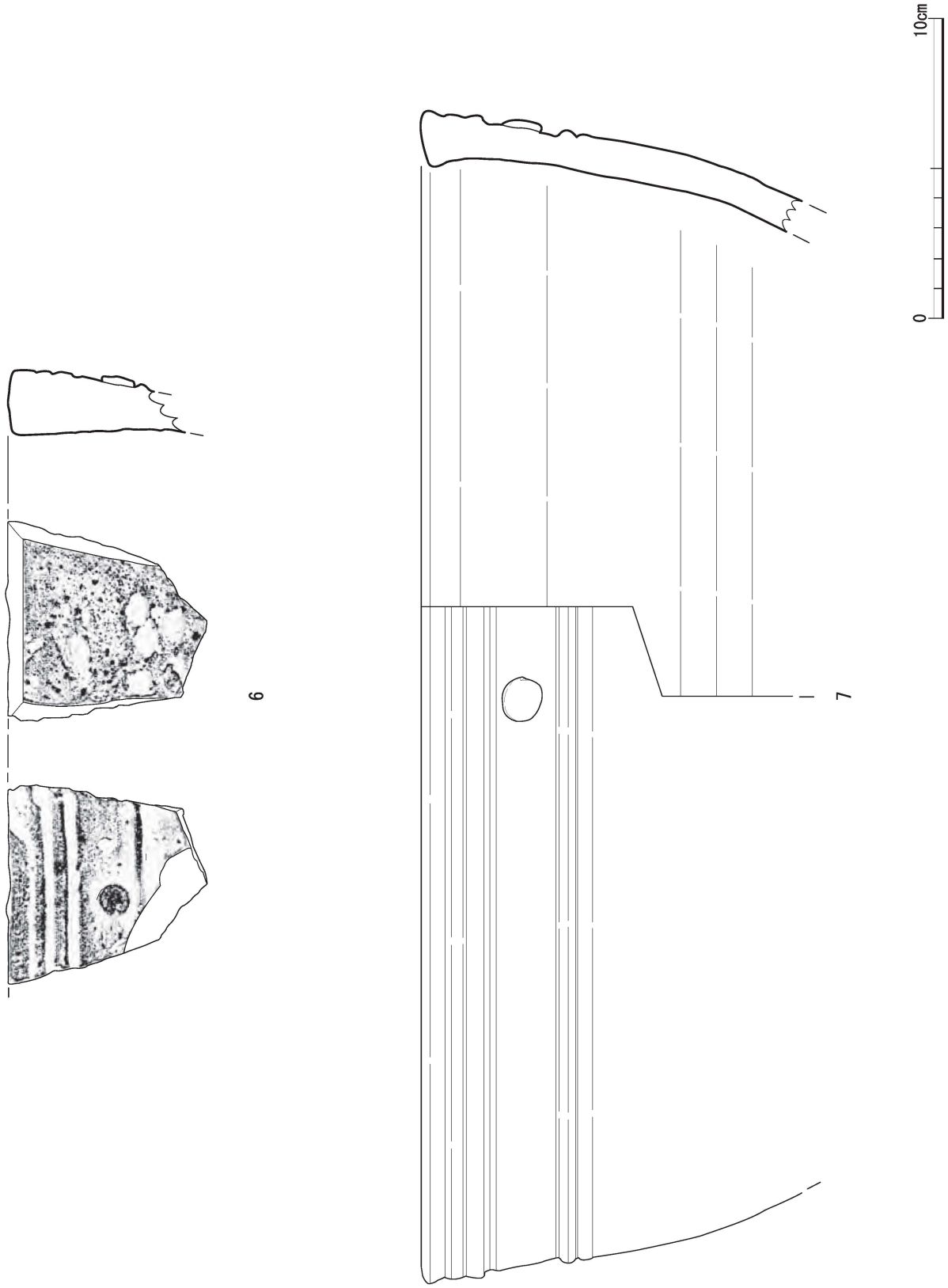


4

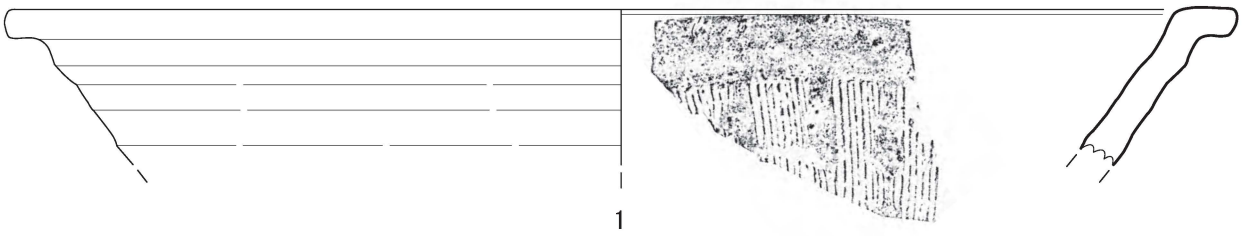


5

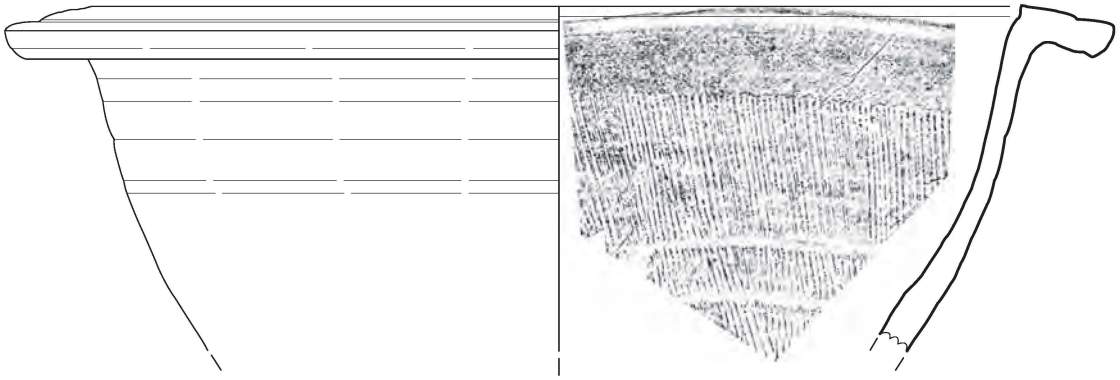
第 13 図(図版 10)　無釉陶器：水鉢



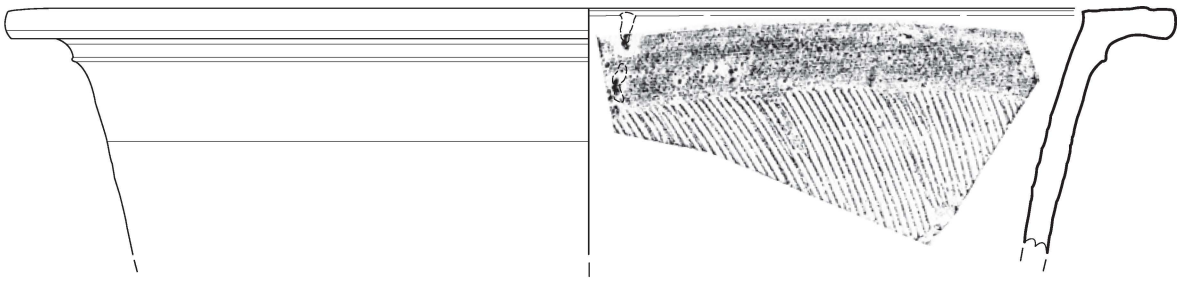
第 14 図(図版 11)　無釉陶器：甕



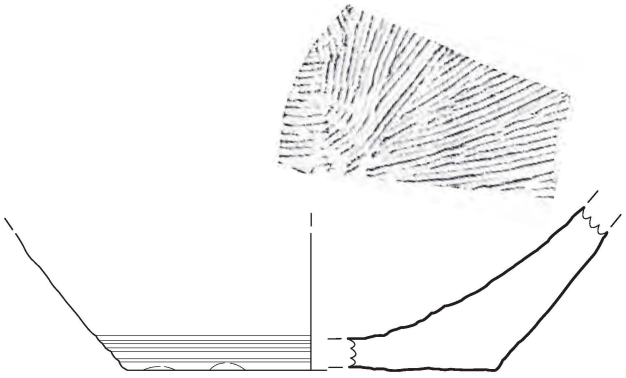
1



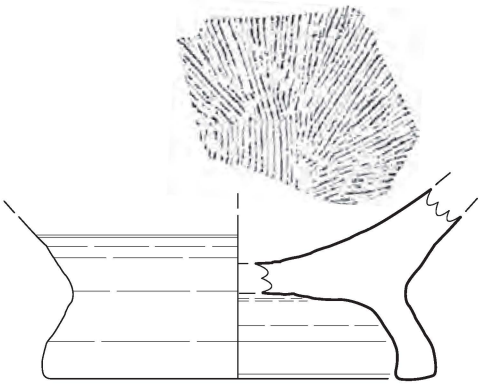
2



3



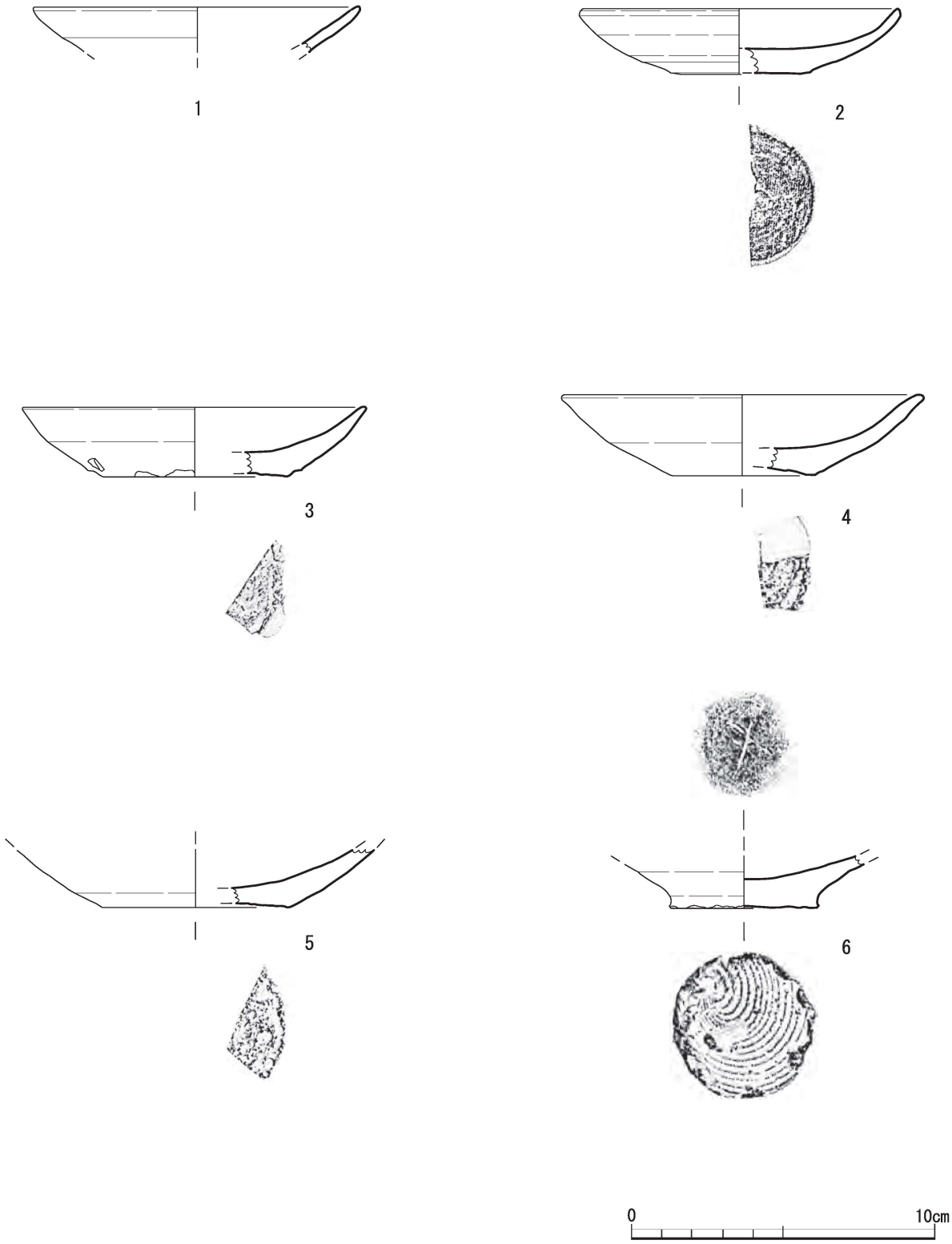
4



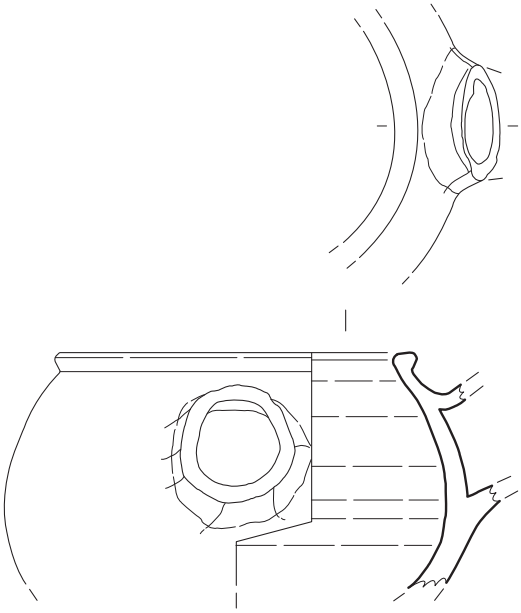
5

0 10cm

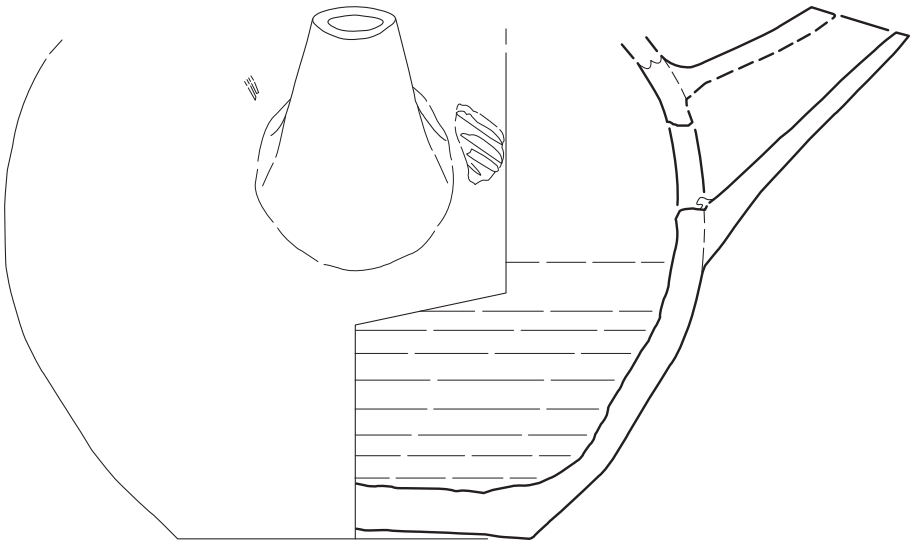
第 15 図(図版 12)　無釉陶器：擂鉢



第 16 図(図版 13)　無釉陶器：皿



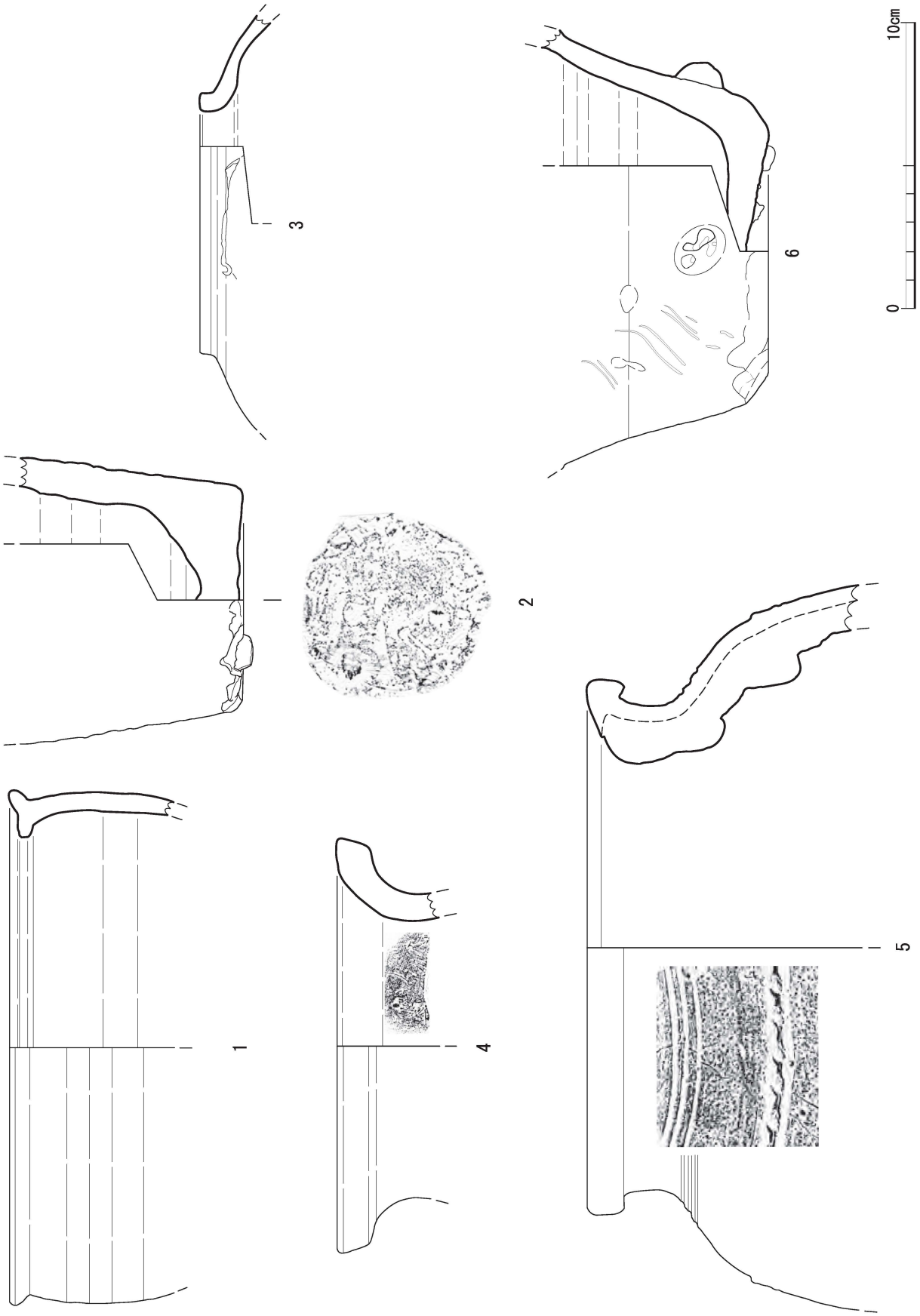
1



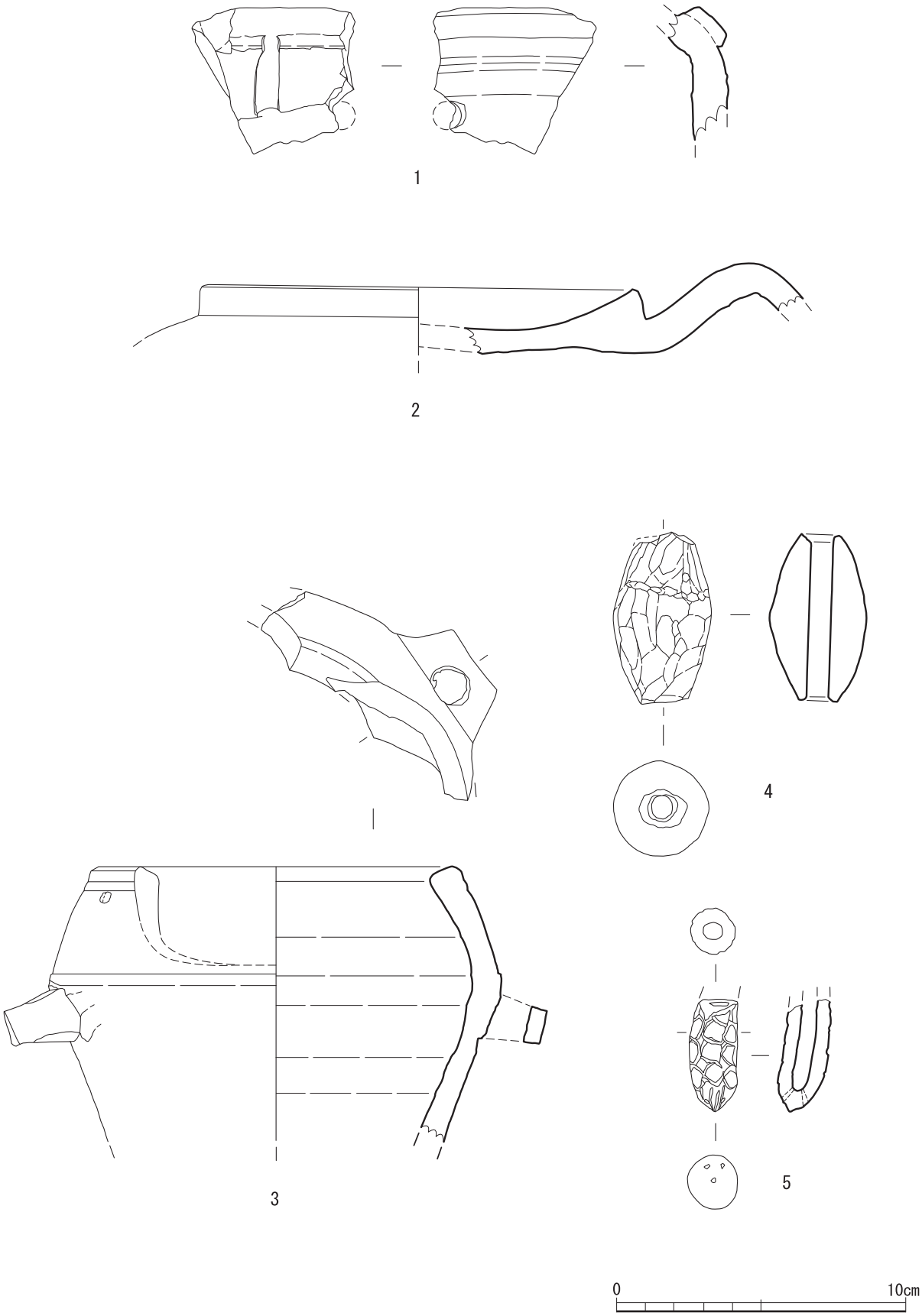
2

0　10cm

第 17 図(図版 14)　無釉陶器：水注（1)、片口（2)



第 18 図(図版 15)　無釉陶器：鉢（1)、徳利（2)、壺（3 ～ 6)



第 19 図(図版 16)　無釉陶器：蔵骨器（1)、蓋（2)、炉（3)、土錘（4)、陶製品（5)

第３節　陶質土器（アカモノ）

器種としては、炉・鍋・皿などが得られた。個々の観察は第６表に示した。

炉・鍋・皿など（第 20・21 図１～８）

１～４に示したものは、炉である。１が口縁部を「く」の字状に折り曲げるもので、２・３が直口のものである。４は内湾形にもので、表面に白線を巡らすものである。

５は薄手の鍋、６は小皿、７は脚台付き皿である。８は器形より落とし蓋を想定したが、高台状の底面が滑らかで、皿に用いた可能性もある。今後検討したい。

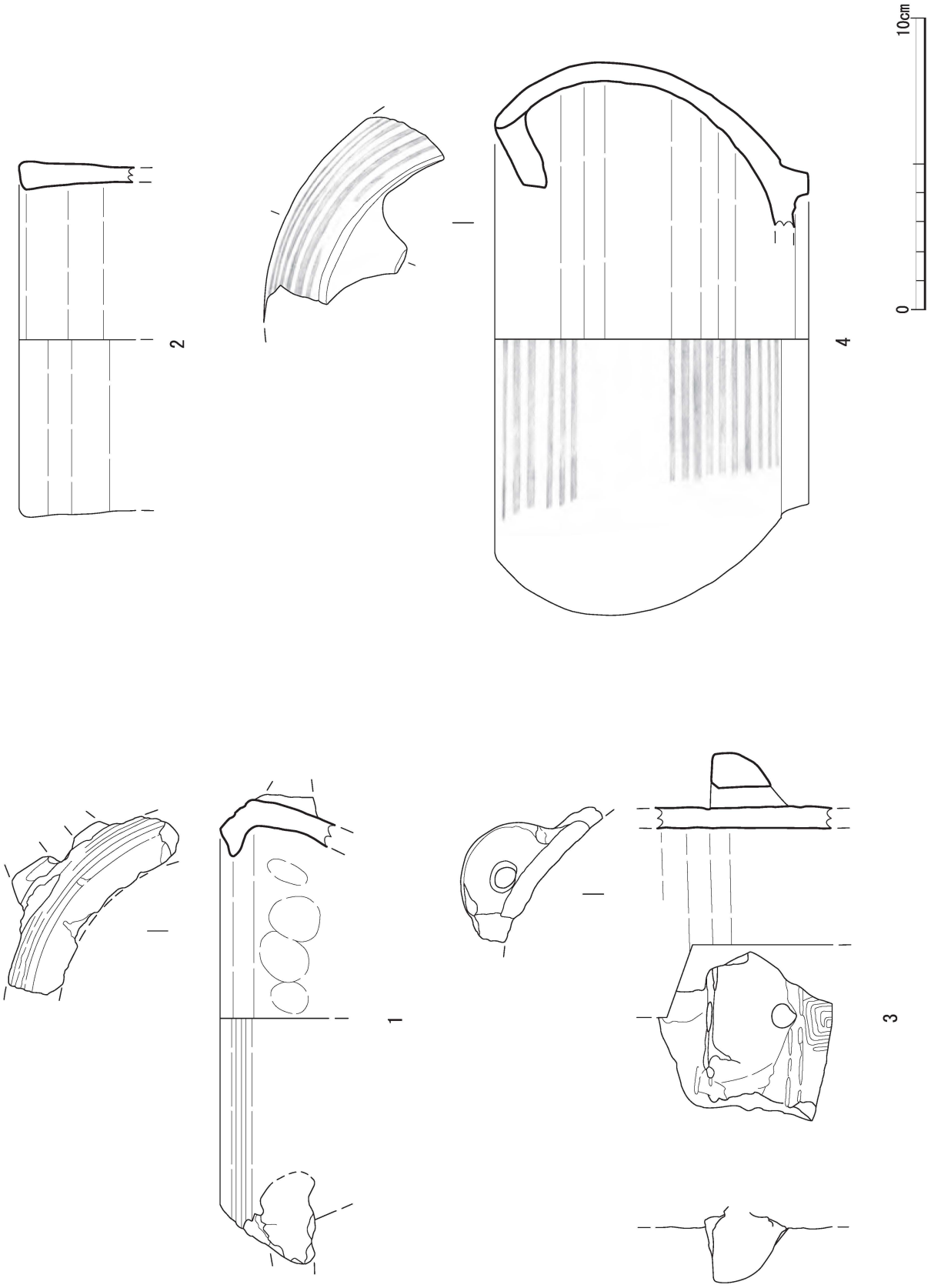
先島諸島の土器（第 21 図９）

赤褐色を呈した厚手の土器の底部である。胎土には石英や千枚質（？）の粒子が大量に観察できる。また、内面はナデ調整が施されているが、外底面の立ち上がりは箆調整である。底径 15cm を計る。「3－え」の４層より出土。

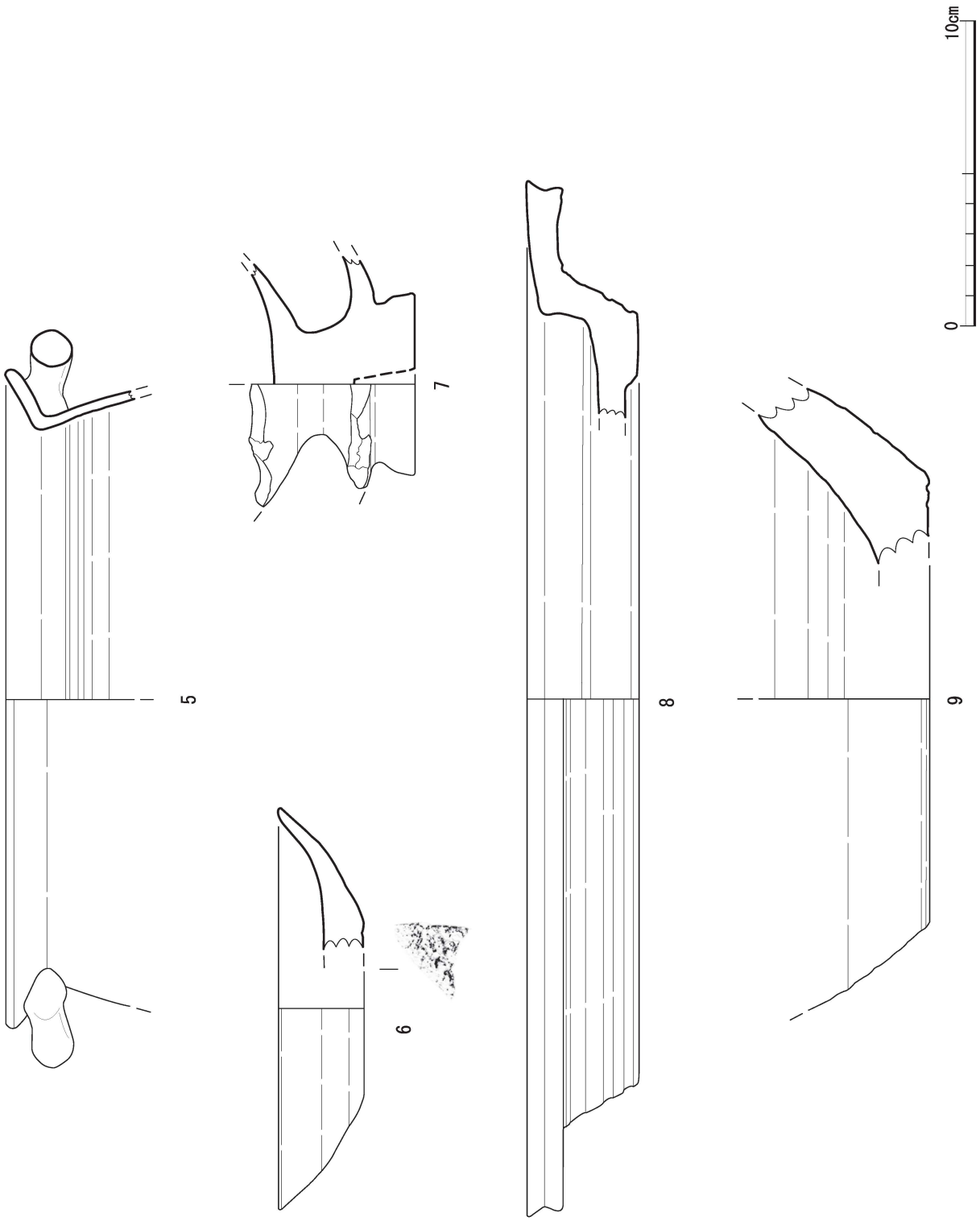
第６表　陶質土器　観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 器高 底径	素地	色調	特徴	出土地点
第 20 図　1 図版 17 の 1	炉	11.1 － －	橙褐色 微粒子	橙褐色	頸部に凹線２条巡らし、把手が１対貼り付けるものである。裏面に把手を貼り付け際の指頭痕が残る。	２おトレ し２も２ 3a 層
〃　2 〃　2	〃	11.8 － －	橙褐色 微粒子	橙褐色	口唇部に薄くスス痕が観察される。	３え ４層
〃　3 〃　3	〃	－ 胴径 14.4	〃	〃	把手を挟む形で２条の波線を巡らす。 把手の下位には幾何学状の文様が施されている。	３え し２も２ 3a 層
〃　4 〃　4	〃	14.6 10.8 11.4	〃	淡茶褐色	表面に白線による文様を巡らす。 内面の突起とその周辺にはスス痕が残る。	３え ４層
第 21 図　5 図版 18 の 5	鍋	21.6 － －	〃	〃	器表面にはロクロ痕が残り、指頭には粉末が残る。	３え し２ 3a 層
〃　6 〃　6	小皿	13.2 2.8 5.6	〃	〃	〃 底厚が厚く 1.6cm を計る。 底面には箆起し痕が残る。	〃
〃　7 〃　7	脚台付き皿	－ － 6.0	橙褐色 微粒子	赤色の強い橙褐色	最上部が皿を呈し、その下位にも皿状の受け部を設ける。底面は丁寧に整形し中心に径約 0.9cm の孔が施されている。	〃
〃　8 〃　8	蓋？	34.0 5.4 25.3	〃	橙褐色	器表面にはロクロ痕が残り。胴下半部に凹線２条を巡らす。高台状の底面は滑らかである。	２えトレ １層



第 20 図(図版 17)　陶質土器：炉



第 21 図(図版 18)　陶質土器：鍋（5)、灯明皿（6)、灯明具（7)、蓋（8)
先島諸島の土器 : 底部（9)

第４節　窯道具

器種としては、ハマ・サヤ・トチンなどが得られた。個々の観察は第７表に示した。以下、器種別に略述する。

円形ハマ（第 22 図１～５）

平面形が円形のもので、表裏面に糸切り痕やレコード盤のような溝等の一群である。５の標品は凹状のもので、周辺に泥状の砂が付着したものである。

抉り入りハマ（第 23 図１～５）

上面に３ヶの抉りを施したもので、上下端面に白土（耐火土）が見られる一群である。

筒状のトチン（第 24 図１～９）

底面は円形を呈し、口部へ窄まる筒状のものである。サイズに大小が見られる。基本的に口部と底面には、白土（耐火土）を施す。中には、砂を泥状に付したものも見られる。

中空のトチン（第 25 図１・２）

筒状の中空のものである。２は釉薬を施しており、窯道具を２次的に使用したものなのか。

サヤ（第 25 図３～６）

３は皿状の器形を反転させたもので、見込み部が抜けたものである。重ねて使用したものと思われる。４・５はサヤの蓋か。

円柱状製品（第 26 図１～７）

円柱状に成形された小振りなもので、上端面に薄く白土を巡らす一群である。6･7 は下部をやや尖らすが、段状のかかりが見られる。壺屋で「チカシ」[註2] と呼ばれているものである。ちなみに、チカシとは「～支える」の意。

中空のハマ（第 27 図 1）

桶胴形のハマ（第 27 図２・３）

いずれも壺などの口縁部に被せ用いるものである。2･3 については、壺屋では「グウチャー」と呼称されているものである。

タナイタ・タナボウ（第 28 図１～５）

１は方形の板状のもので､2 ～ 5 は円柱状のものである。後者は上下面に白土（耐火土）を施した一群である。体部周辺にも白土の付着が顕著である。いずれも手触りはザラザラ感がある。前者は「タナイタ」、後者は「タナボウ」と呼ばれている。

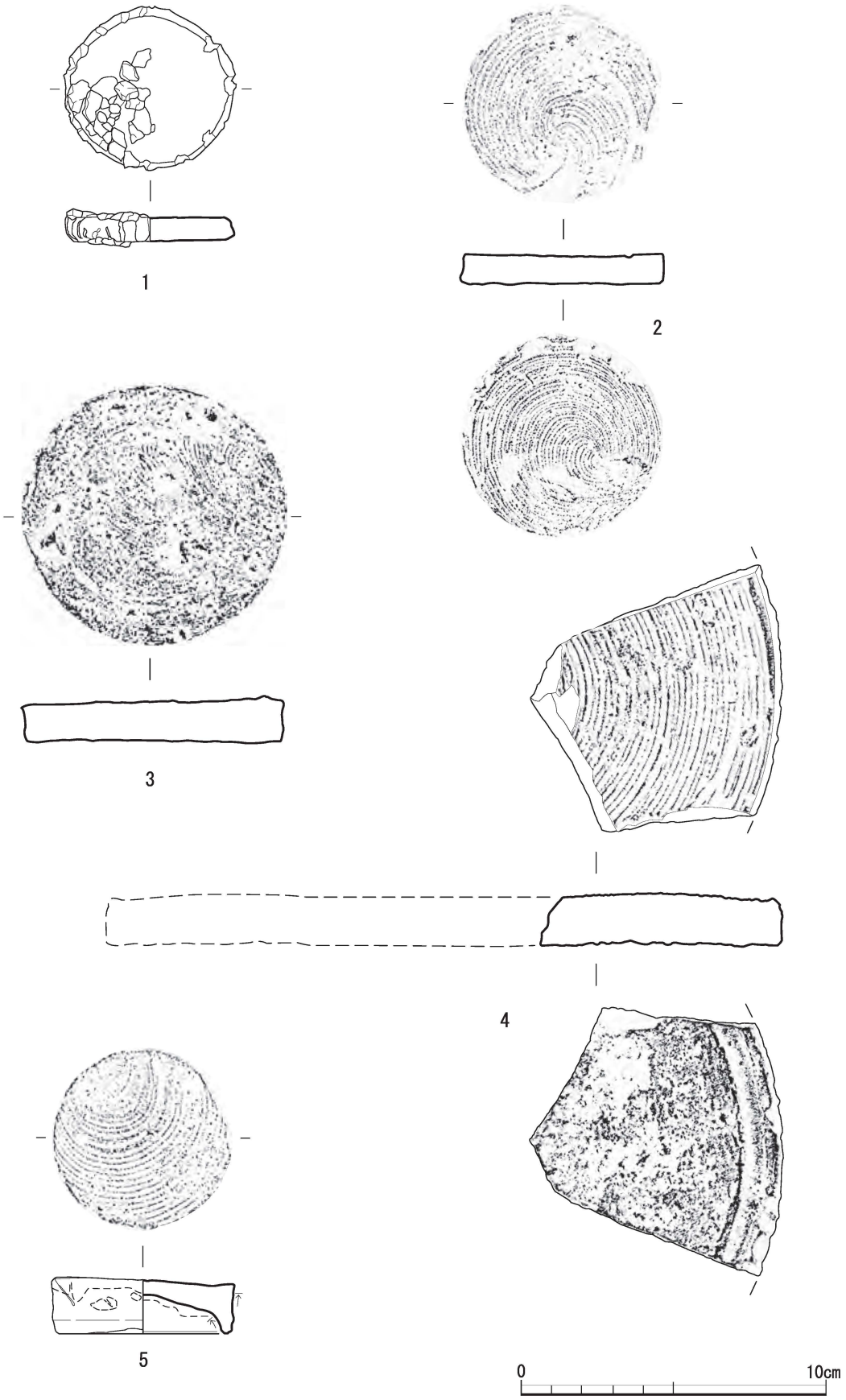
第７表　窯道具　観察一覧

単位：cm

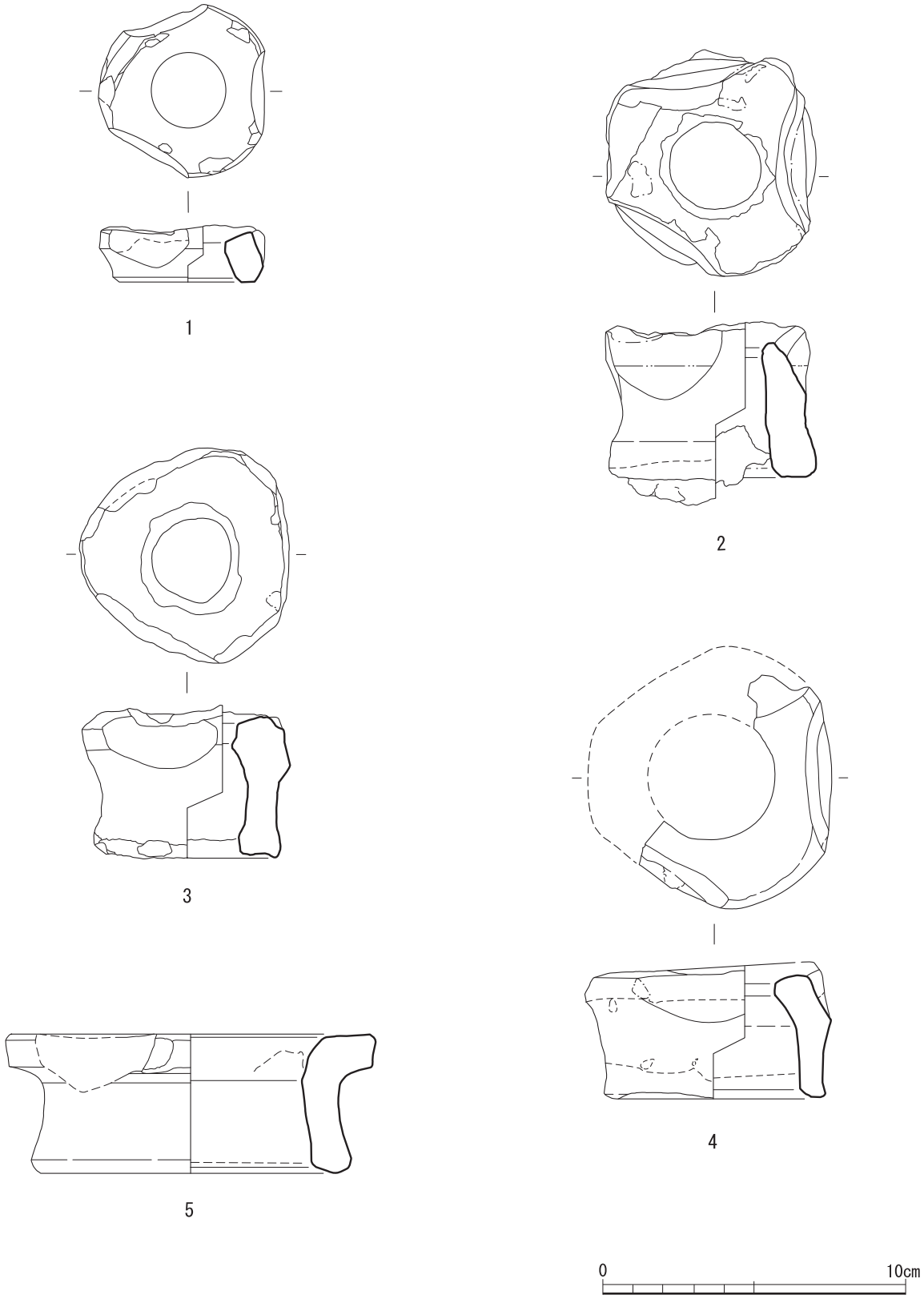
挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口　径 器　高 底　径	素　地	特徴	出土地点
第22図　1 図版19の1	円形 ハマ	5.6 0.8 －	粗粒子	周辺にひび割れが見られ、表裏面に白土が付着。	３え １層
〃　2 〃　2	〃	6.7 1.0 －	茶褐色で 粗粒子	表裏面に左右の糸切り痕が残り、白土の付着も見られる。	２え １層
〃　3 〃　3		8.6 1.5 －		表面に左回転の糸切り痕が残り、白土や器物痕が観察される。また、断面付近では、釉薬の付着が顕著に観察される。	〃
〃　4 〃　4	〃	22.2 1.6 －	茶褐色で 粗粒子	表面にレコード盤状の溝が走り、黒褐色の釉薬の付着が見られる。裏面端部は1.1cm幅で削りが施されている。	〃
〃　5 〃　5	〃	6.0 1.9 －	灰褐色で 微粒子	凹状のもので、周辺に砂が付着。平坦面には左回転の糸切り痕が見られる。	〃
第23図　1 図版20の1	抉り 入り ハマ	5.4 1.9 4.5	淡黄土色で 微粒子	口部と底面に白土を塗布。	３う １層
〃　2 〃　2	〃	6.6 5.2 6.8	灰褐色で 微粒子	〃 底面から内部にかけて窯土が付着。また、体部全体には光沢のある褐釉が見られる。	３え・お ４層
〃　3 〃　3	〃	6.5 5.1 6.2	〃	〃 体部全体に濃い褐釉が見られる。	３・４え ４層
〃　4 〃　4	〃	7.3 4.5 7.2	淡黄土色で 微粒子	〃 白土はひび割れが見られる。 体部全体には光沢のある淡い褐釉が見られる。	４え ４層
〃　5 〃　5	〃	12.2 4.6 9.9	淡黄土色で 微粒子	１と類似。	３え し２も２ 3a層
第24図　1 図版21の1	筒状の トチン	3.2 3.0 4.0		口部と底面に白土が見られるが、くびれ下部にも泥砂が見られる。	３ら し２ １層
〃　2 〃　2	〃	4.4 3.5 5.4	灰白褐色で 微粒子	口部と底面に白土が見られる。 内部には窯土？が見られる。	３う ４層
〃　3 〃　3	〃	5.0 5.8 7.3	淡茶褐色で 粗粒子	〃 底面に左回転の糸切り痕が見られる。	３え・お ４層
〃　4 〃　4	〃	－ 4.5 10.3	淡橙褐色で 粗粒子	〃 体部全体には淡い砂泥状のものが付着。	２おトレ し２ 3a層
〃　5 〃　5	〃	8.6 7.1 9.5	〃	底面に砂泥状のものが付着。 左回転の糸切り痕も見られる。	３え ４層
〃　6 〃　6	〃	－ 9.6 －	暗褐色の 粗粒子	〃 かなり使用されたものと思われ、釉薬・窯土が付着。 体部に孔が見られる。	３え し２ 3a層

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 器高 底径	素地	特徴	出土地点
〃 7 〃 7	筒状のトチン	－ － 6.3	灰白褐色で微粒子	底面に砂泥状のものが見られ、体部表裏面に顕著にろくろ痕が残る。 体部上に孔が見られる。	2えトレ し2も2 3層
〃 8 〃 8	〃	－ － 11.8	〃	底面は凹状の浅い上げ底を呈する。現行で孔が2ヶ確認される。	2おトレ し2も2 3a層
〃 9 〃 9	〃	11.2 6.0 14.6	茶褐色で粗粒子	内面に白土の付着が顕著。	2おトレ し2 3c層
第25図 1 図版22の1	中空のトチン	4.1 － －	茶褐色 粗粒子	口部面の中央は破損しているが、糸切り痕が残る。白土も観察される。	3・4え 1層
〃 2 〃 2	〃	－ 5.1 3.4	灰褐色で微粒子	白化粧後に呉須と透明釉を施す。下端部は露胎。 底面は糸切り痕が残る。 中空を呈し、窯道具を2次使用？	3・4え 1層
〃 3 〃 3	サヤ	－ 2.5 10.8	灰白色で微粒子	口部と底面に白土。高台状の箇所に抉り。 外面茶褐色を呈する。	3え し2も2 3a層
〃 4 〃 4	〃	－ 2.5 25.2	淡黄土色で粗粒子	褐色粒が散見。蓋？	3え し2 3f層
〃 5 〃 5	〃	－ 5.0 10.8	〃	底面と上面に白土が見られる。 上面には左回転糸切りが残る。端部に窪みが見られる。	3え し2も2 3a層
〃 6 〃 6	〃	－ － 23.3	淡茶褐色 粗粒子	底面と内面に白土が見られる。 体部には釉薬が付着。かなり使用されたようである。	3え4え 1層
第26図 1 図版23の1	円柱状製品	－ 1.9 2.7		口部と底面に白土が見られる。	3・4え 1層
〃 2 〃 2	〃	－ 2.7 2.2	灰褐色で微粒子	上面に薄く白土が見られる。 側面には素土を押し上げた指頭痕が残る。	2え 1層
〃 3 〃 3	〃	－ 2.8 2.4	〃	〃	3う し2 2層
〃 4 〃 4	〃	－ 4.1 2.2	〃	〃	〃
〃 5 〃 5	〃	－ 5.2 2.6	淡黄土色で微粒子	〃 緑釉の付着が見られる。	2え 1層
〃 6 〃 6	〃	－ － 9.6	〃	上面に薄く白土が見られる。 側面には素土を押し上げた指頭痕が残る。 上面に呉須が付着。底面には陶片の付着。	3え し2 1層
〃 7 〃 7	〃	－ 3.9 6.3	灰白褐色で微粒子	体部周辺を面取りで成形。 上面に呉須が付着。	3・4え 1層

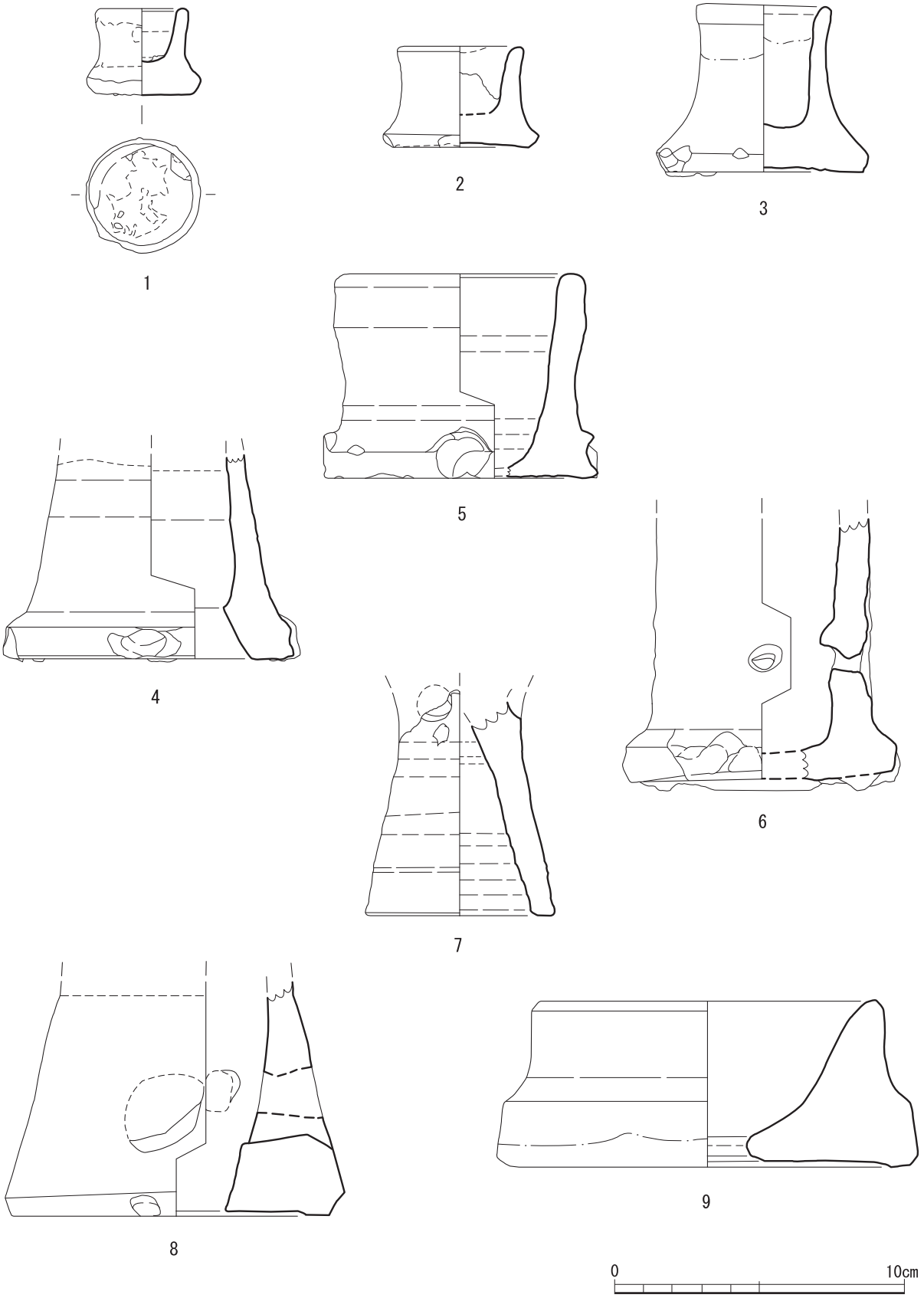
挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口　径 器　高 底　径	素　地	特徴	出土地点
第 27 図　1 図版 24 の　1	中空のハマ	15.5 － －	暗褐色で粗粒子	表面は薄く褐色釉を施し滑らかである。	3 え し 2 も 2 3a 層
〃　2 〃　2	桶胴形のハマ	19.6 － －	淡茶褐色で粗粒子	上面の中心に孔（径 4cm）が施され、その周辺には同心円状の浅い溝が走る。	3 う し 2 も 2 3a 層
〃　3 〃　3	〃	24.0 － －	〃	側面に孔を有する。外面は自然釉が黄土色に発色。	3 え 1 層
第 28 図　1 図版 25 の　1	タナイタ	－ 4.3 －	灰白色で粗粒子	底面と上面に白土が散見できる。 手触りがザラとする。	3・4 え 1 層
〃　2 〃　2	タナボウ	5.6 19.0 5.9		上下端に白土の付着。手触りザラとする。 体部に「友」の字が印刻されている。	3 え・あ 1 層
〃　3 〃　3	〃	－ 19.7 6.4		上下端と体部に白土が付着。手触りがザラとする。体部に「〇に久」が印刻。	〃
〃　4 〃　4	〃	－ 18.6 6.0		上下端に白土の付着。手触りザラとする。 上端部で破損しているが、そのまま使用。	〃
〃　5 〃　5	〃	6.0 16.0 6.2		上下端に白土の付着。手触りザラとする。 体部は釉薬がはがれ黒釉が観察される。	〃



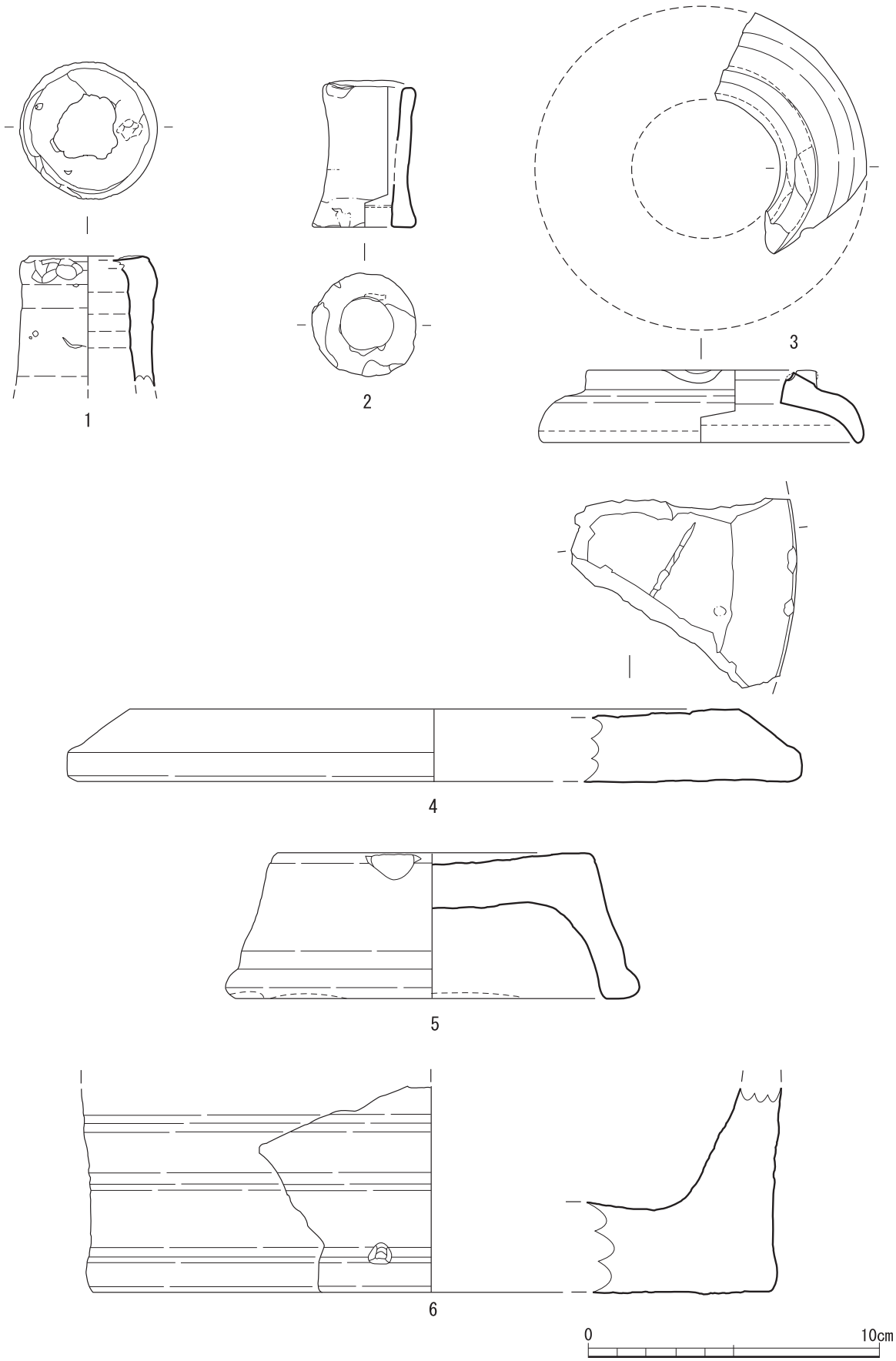
第 22 図(図版 19)　窯道具：円形ハマ



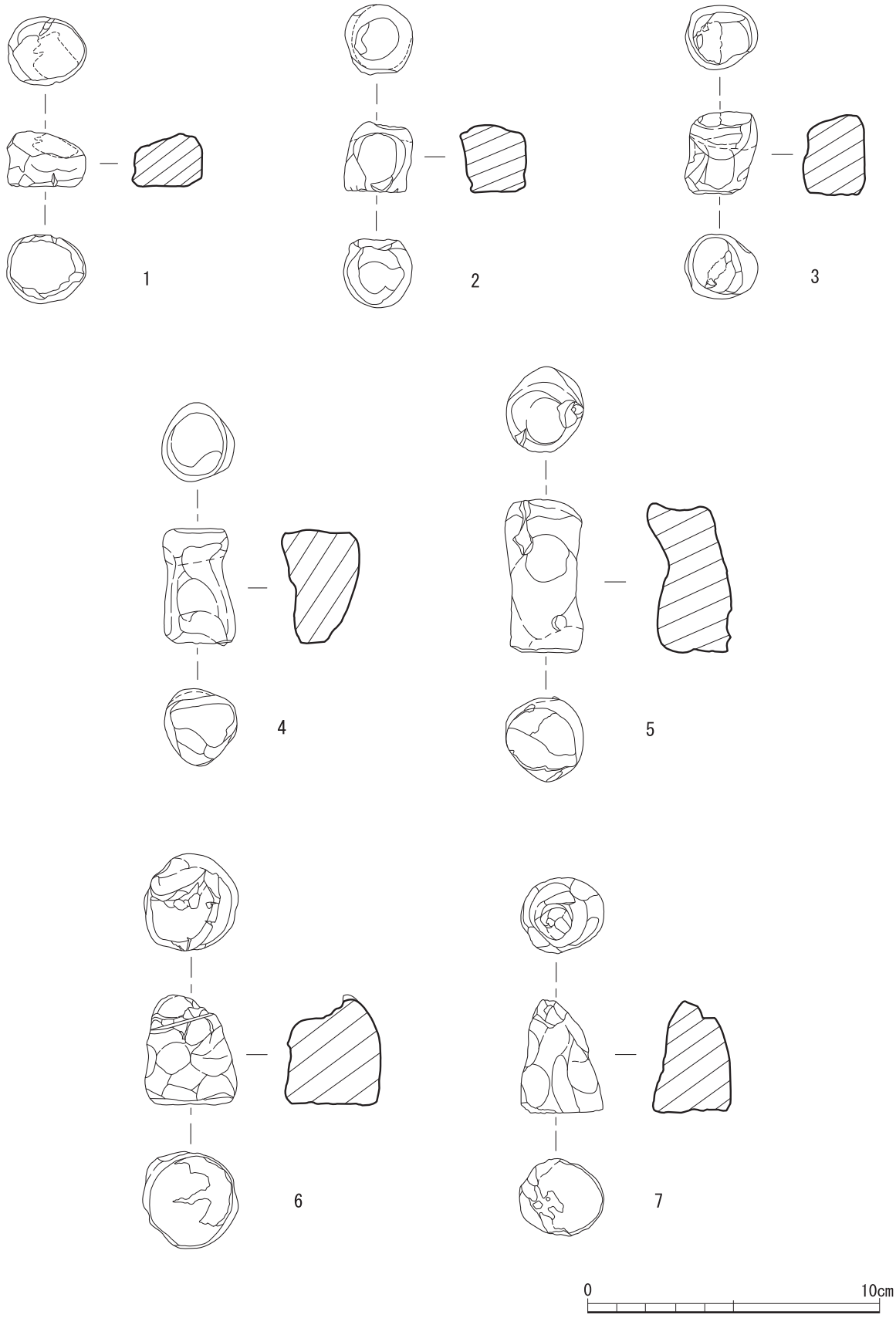
第 23 図(図版 20)　窯道具：抉り入りハマ



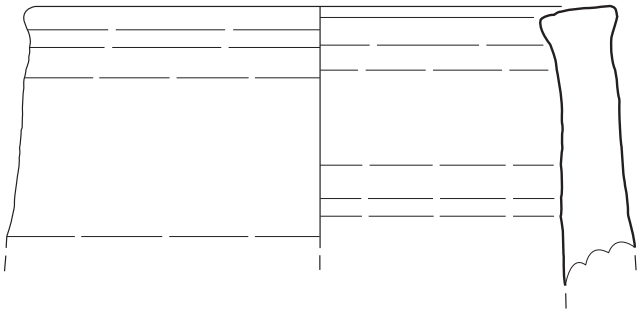
第 24 図(図版 21)　窯道具：筒状のトチン



第 25 図(図版 22)　窯道具：中空のトチン（1・2)、サヤ（3 ～ 6)

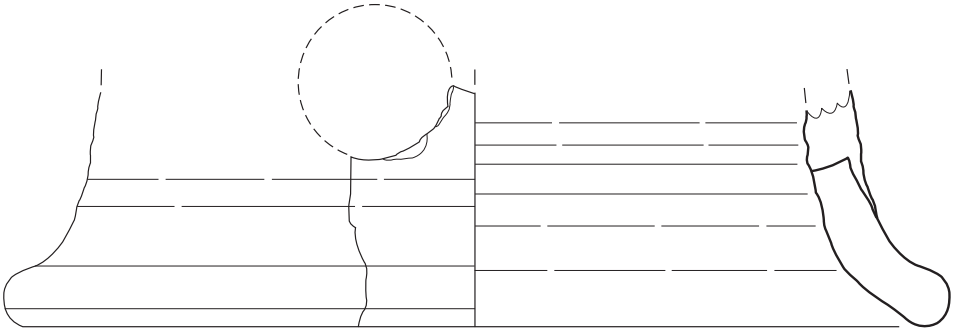


第 26 図(図版 23)　窯道具：円柱状製品



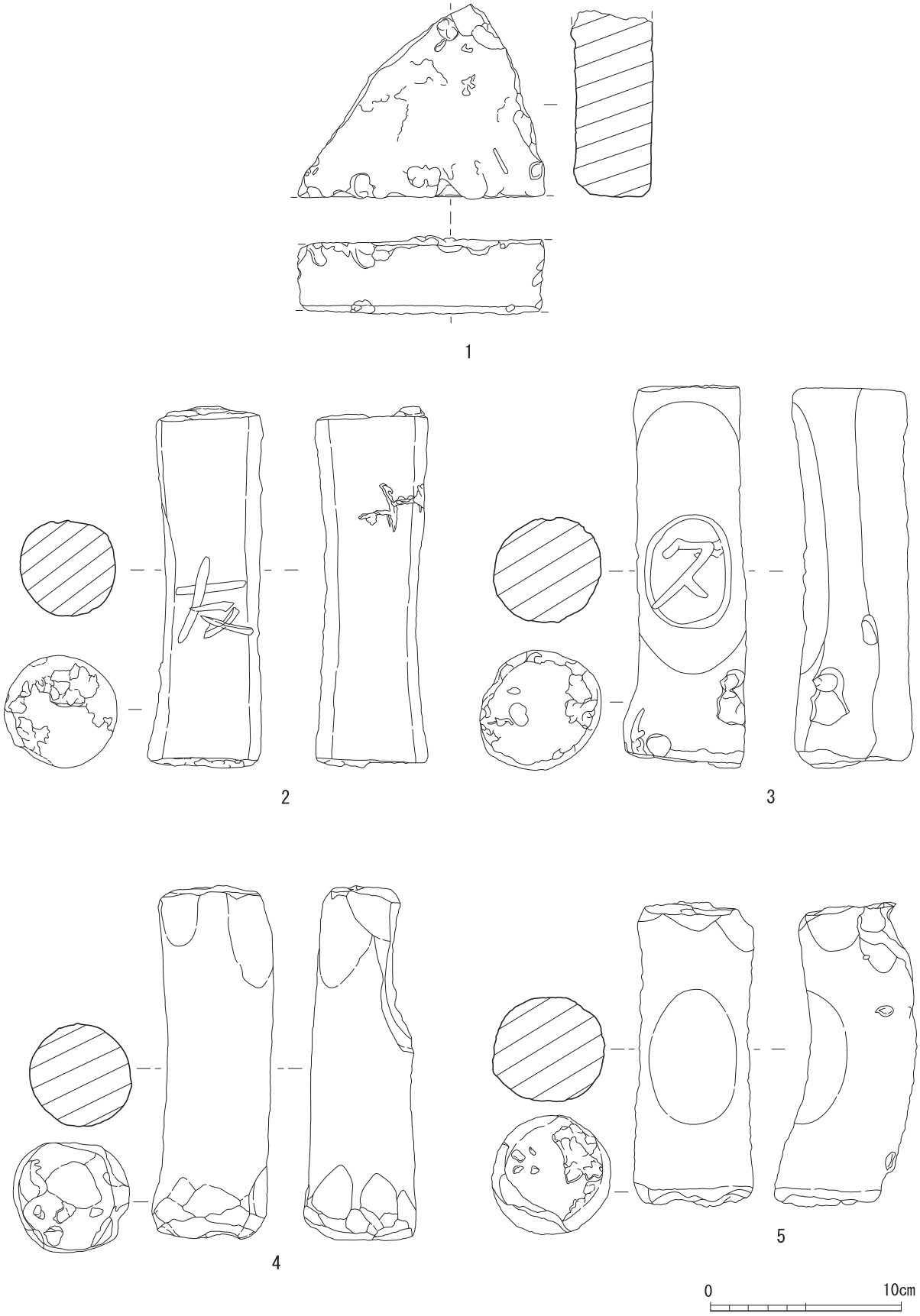
1

2



3

第 27 図(図版 24)　窯道具：中空のハマ（1)、桶胴形のハマ（2・3)



第 28 図(図版 25)　窯道具：タナイタ（1)、タナボウ（2 ～ 5)

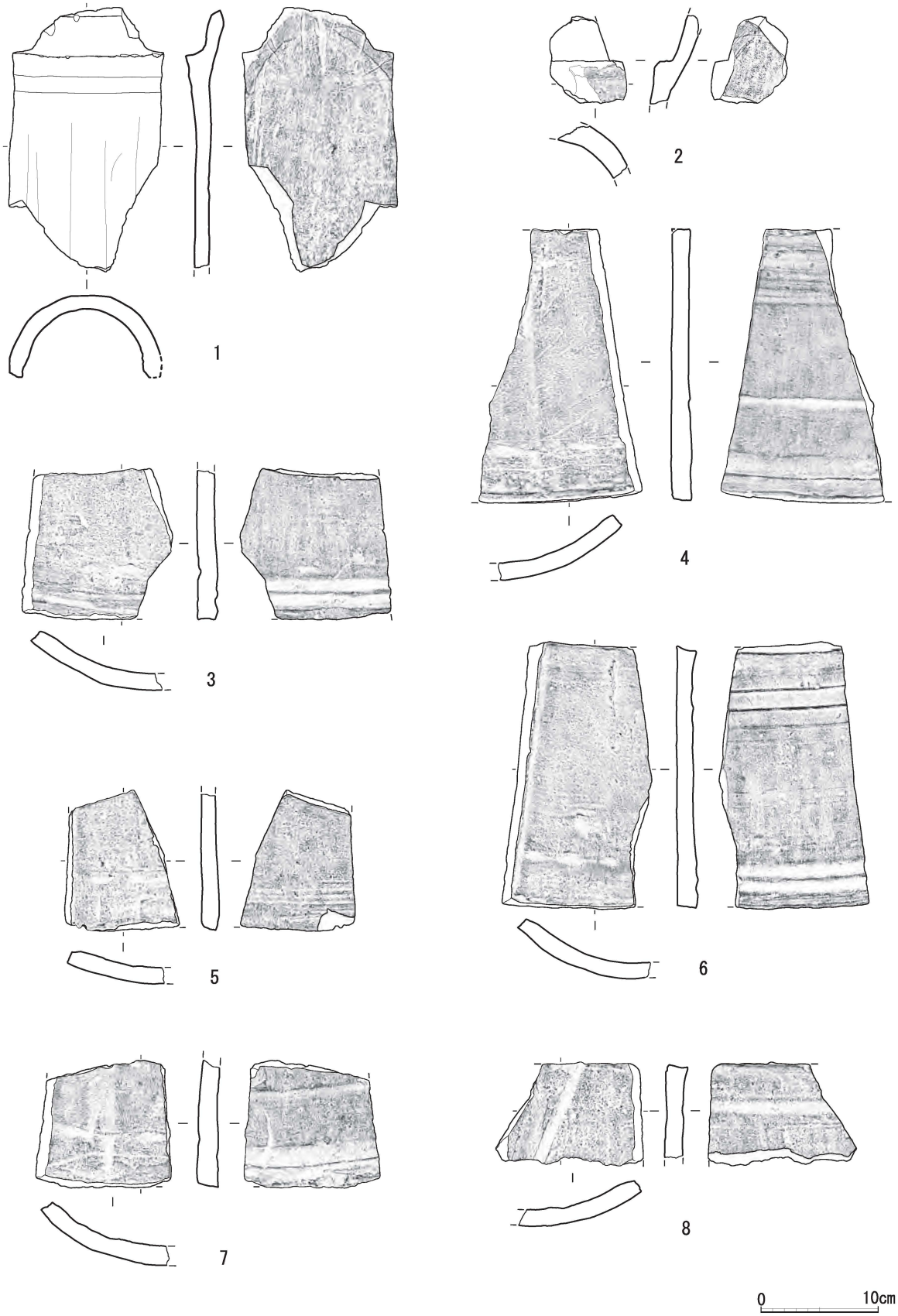
第５節　瓦

瓦はいわゆる「赤瓦」が得られた。軒瓦は見られず、全て丸・平瓦である。技法は明朝系で内面に布目痕・紐痕が観察され、端部には分割のために浅い窪みが見られる。平瓦は表面端部に凹線状の窪みを数条に観察できる。丸瓦の玉縁裏面にはシャープな面取りが施されている。また、漆喰の付着が散見できる。おそらく、東ヌ窯の覆屋に用いられたものと思われる。以下、観察表を参考されたし。

第８表　瓦　観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	種　類	特　徴	法　量	色　調	出土地点
第 29 図　1 図版 26 の　1	丸瓦	表面は縦に面取り。裏面は布目痕が残る。漆喰も散見できる。	胴径推定 13cm	表裏は赤褐色。 焼成良好。	３え・お も１ １層
〃　2 〃　2	〃	〃	不明。	〃 上記に比べると焼成弱い。	３え し２も２ 3a 層
〃　3 〃　3	平瓦	表面は面取り後ナデ。下端面に２条の凹線が巡る。裏面は布目痕と紐の凹部が見られる。	〃	表裏面とも赤褐色。 焼成良好。	２う～２か 表面清掃
〃　4 〃　4	〃	表面ナデ調整。凹線が５条見られる。裏面には布目痕や紐 の凹部が観察され、漆喰が付着。	長さ 23cm	表裏面とも桃褐色。 焼成良好。	〃
〃　5 〃　5	〃	表面ナデ調整。２次焼成のススが付着？。裏面は布目痕と紐痕。	不明。	表裏は赤褐色。 焼成良好。	〃
〃　6 〃　6	〃	表面ナデ調整。凹線が上下端に見られる。裏面には布目痕や紐の凹部が観察され、漆喰が付着。	長さ 22.3cm	表裏は赤褐色。 焼成良好。	〃
〃　7 〃　7	〃	表面ナデ調整。凹線が見られる。裏面には布目痕や紐の凹部が観察され、漆喰らしきものが付着。	不明。	表裏面とも桃褐色。 焼成良好。	〃
〃　8 〃　8	〃	表面は面取り後ナデ。端部に１条の凹線が巡る。裏面は布目痕と削り痕が見られる。	〃	表裏は桃褐色。 焼成良好。	２おトレ し２ 3b 層



第 29 図(図版 26)　瓦：丸瓦（1・2)、平瓦（3 ～ 8)

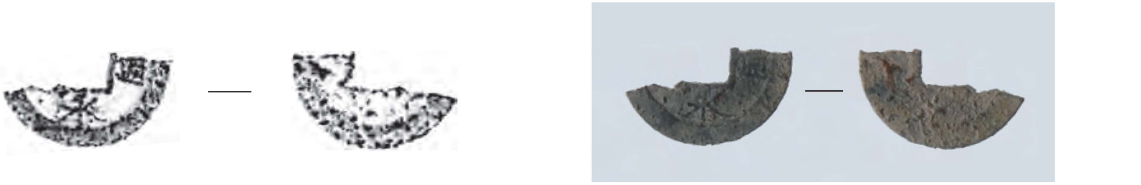
第 6 節　本土産陶器（第 31 図 1・2）

1・2 とも摺鉢で、1 は玉縁状の口縁部を持つもので、光沢のある茶褐色釉を施したものである。内面の櫛目は浅く上端部は摺り消されている。口径 30.8cm を計る。素地は灰褐色で微粒子。「3 －う」グリッドの 1 層より出土。

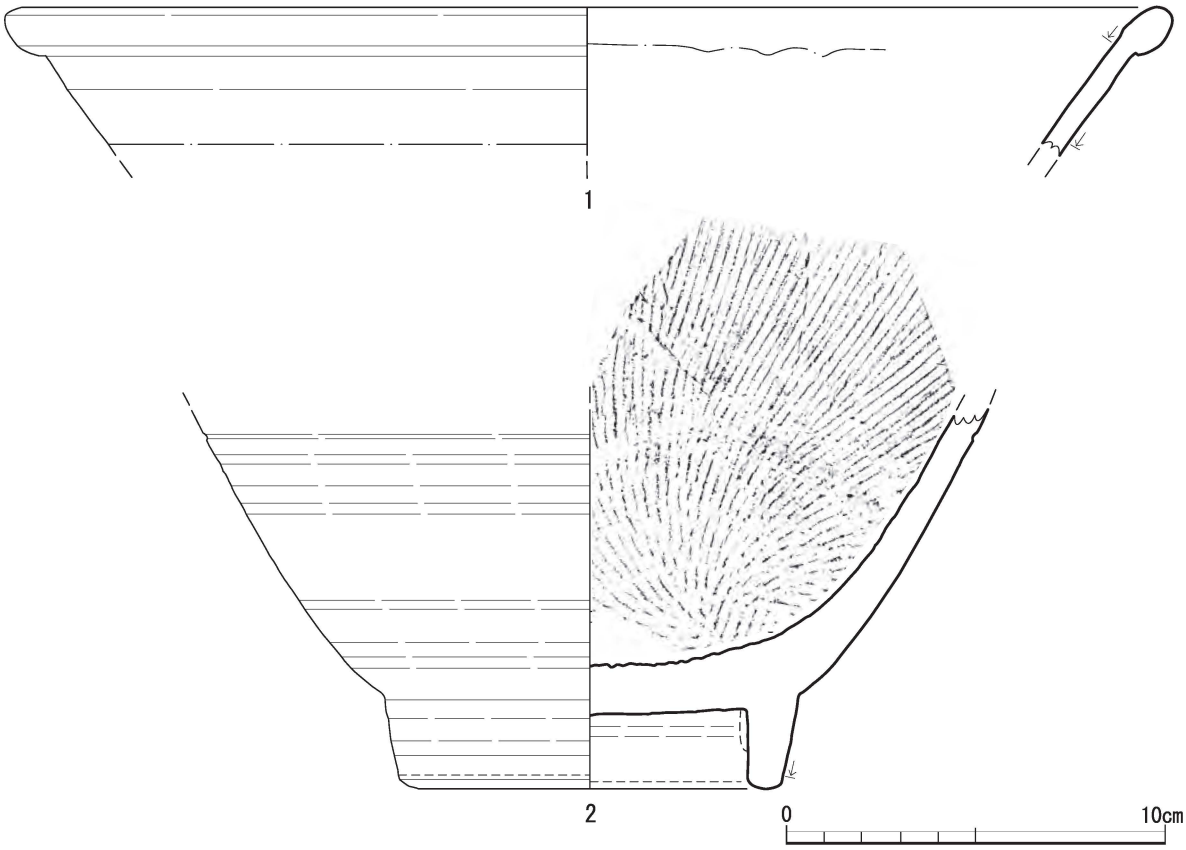
2 は底部で、薄い茶褐色釉を施釉。器表面は丁寧に箆削りが施され横線状痕が残る。畳付けには白土が施され、細かい短線が斜めに観察される。内面は 8 条 1 組の櫛目が摺り上げ、見込みには他の器物痕（白土）が弧状に残る。素地は灰褐色の微粒子で、高台径 9.4cm を計る。「3 －え」グリッドの 1 層より出土。

第 7 節　銭貨（第 30 図）

寛永通宝の半欠品で、「〇永通〇」の 2 文字が読める。径 2.21cm を計り、重さは 1.0g、厚さは 1.0mm である。「2 －え」トレンチの物原 1（1 層）より出土。



第 30 図（図版 27）　銭貨



第 31 図（図版 28）　本土産陶器：擂鉢

第Ⅴ章　まとめ

以上、小範囲の発掘調査であったが、ここでは、その調査成果より若干の要点に触れまとめとしたい。

立地について

第１図に示したとおり、市内には瓦窯を含めて７箇所の窯跡が分布する。生産する焼物や操業時期はそれぞれ異なるが、窯の近くには河川が近接しており材料・生産品などの搬入・搬出には配慮していたことが窺える。また、第２図の明治初年の頃の読史地図を見ると壺屋村あたりは、小高い丘陵とその周辺には湿地帯が広がっている。その丘陵斜面地に明治～昭和期において窯跡が立地していたことが聞き取り調査で明かにされている（第３図）。このことは、琉球王府時代においても小高い丘陵の斜面地を利用していたものと思われる。壺屋の焼物は釉薬を施す施釉陶器（ジョウヤキ）と釉薬を施さない無釉陶器（アラヤキ）の２種に大きく分けられる。それぞれの窯は壺屋の東側に施釉陶器、西側に無釉陶器の窯が偏在する傾向が指摘されている。本窯はその施釉陶器の代表的な窯で、東側にあるところから「東ヌ窯」の名で知られている。

窯の住み分けについては、壺屋の成り立ち･広がり等々など様々な検討が必要されるが、窯名には「東（アガリ）･西（イリ）･南（フェー）」など方位を付した窯と屋号「メェーノウチノカマ」､陶工名「コウユウカマ」など窯名を付したものなど多様にある。「方位名の窯」「屋号の窯」「陶工名の窯」の時期的な推移が想定されるが、今後の課題としたい。

層序について

基本的に地山の灰褐色土層を加えて５層が確認された。１・２層は撹乱層で、３層の物原・焼土層、４層が地山への移行層である。３層（物原・焼土）の遺物には隙間が見られ短期間に破棄されたことが窺えた。その３層・４層では施釉陶器の碗類が主に出土した。注目されたのは、３層上層では無釉陶器が殆ど見られなかったが、３層下層･４層では比較的多く出土したことである。ちなみに窯跡に関する遺構（床面・壁面）などは確認されなかった。

出土遺物について

遺物の殆どが壺屋焼と称される陶器類で、その変形品・失敗品、溶着品・窯道具・窯道具の付着したもの等多種多様なものが出土した。その中で､第８図 15･16 見られるような清朝磁器を写した碗も得られており、壺屋焼の年代観を知る手がかりが得られている。また、第７図に示した灰釉碗の溶着資料等も得られた。灰釉碗については「カマニーカマ」[註3] での調査成果により壺屋において生産されていたことが明らかにされている。今回の出土で壺屋での面的な広がりが確認されたものと思われる。無釉陶器は壺・鉢・皿などが見られたが、全体的に下位の層より出土する傾向が見られた。

窯道具はハマ・サヤ・トチンなどが各種見られたが、新たに円柱状製品も確認された。本品は方言で「チカシ」[註4] と呼称されているもので､器物を支える道具とのことである。また､第１層よりタナボウ・タナイタが得られた。タナボウには「友」「〇に久」の刻銘入りのものも見られた。

銭貨は「寛永通宝」の半欠品が得られているが、第１層の埋土よりの出土である。

以上のことから、本遺跡は「東ヌ窯」の物原として位置づけされるが、その下位の層より無釉陶器・灰釉陶器なども出土しており、東ヌ窯以前の古い時期の生産活動も読み取れる。今後は東ヌ窯以前の調査研究も望まれる。また、今後の壺屋焼の研究を進めるにあたり、他の調査地点との比較研究を推し進め壺屋（生産地）での時期区分が必要かと考える。さらに、消費地での時期区分と相まって沖縄の焼き物の時期区分が決定されるものと考える。

〈註〉

註１　　島弘・内間靖・玉城安明他『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市教育委員会　1992 年

註２・４ 陶芸家　島武巳・国吉安子の両氏よりご教示を賜った。

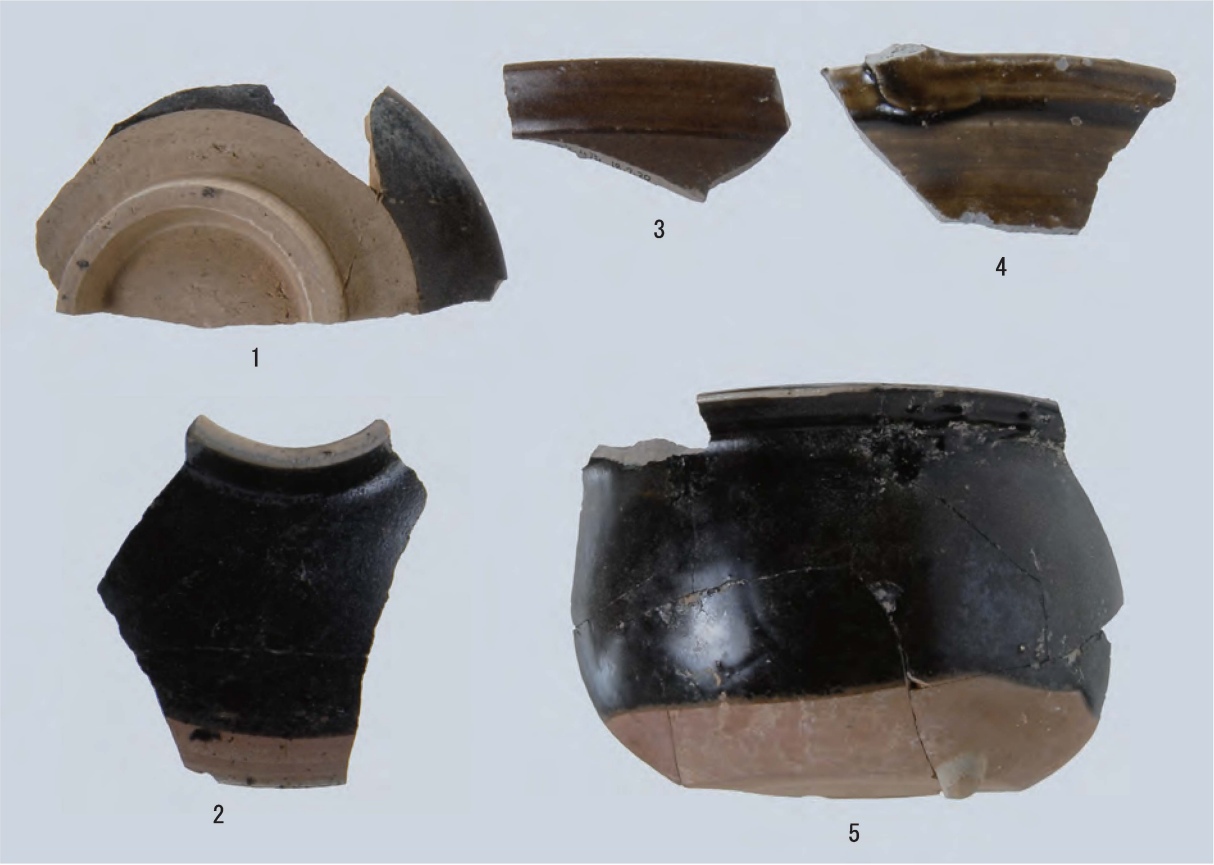
註３　　島弘・玉城安明・仲宗根啓『壺屋古窯群Ⅲ』那覇市教育委員会　1997 年

図　　版

図版 3（第 6 図）　施釉陶器：碗

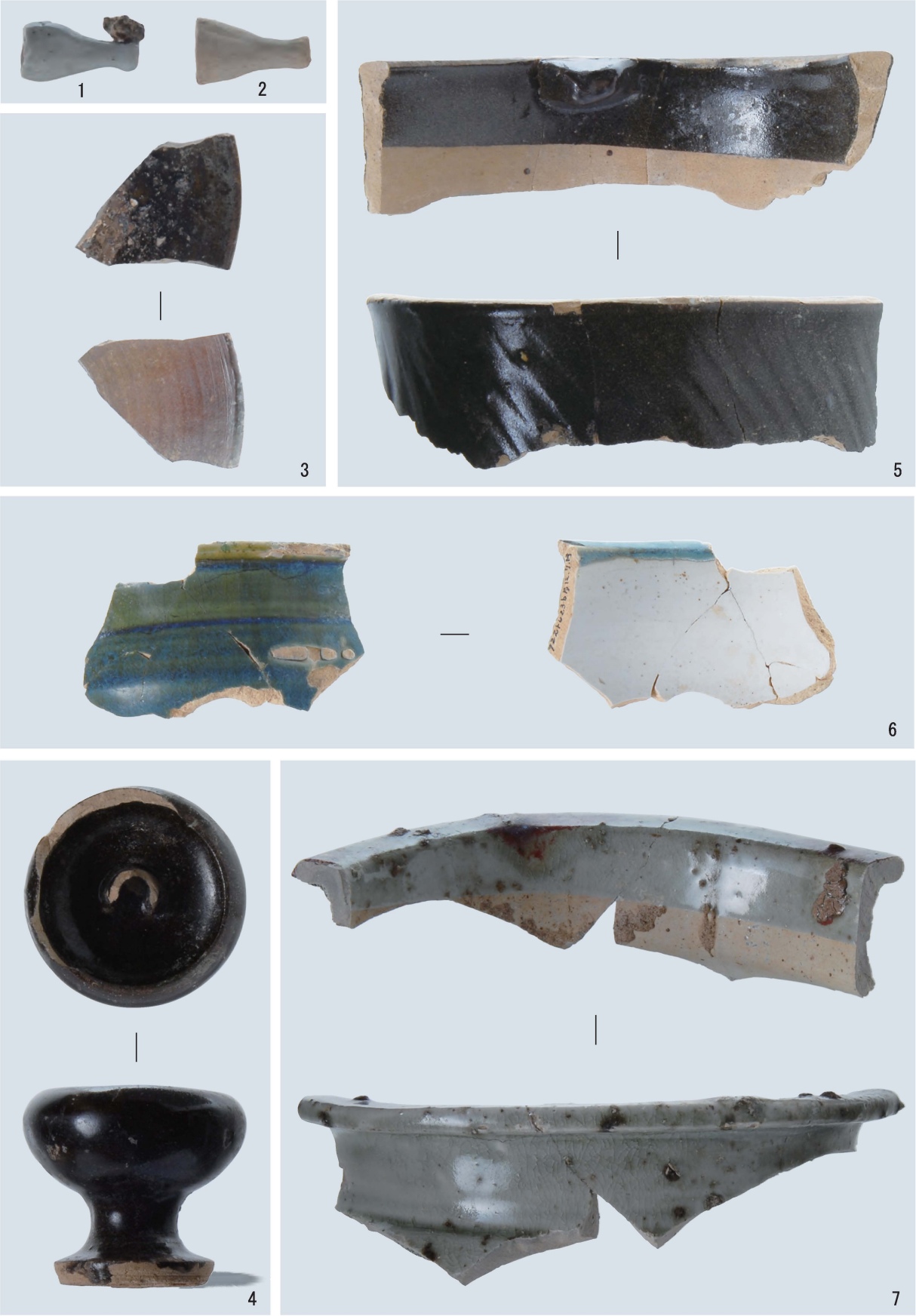
図版 4（第 7 図）　施釉陶器：碗

図版 5（第 8 図）　施釉陶器：碗

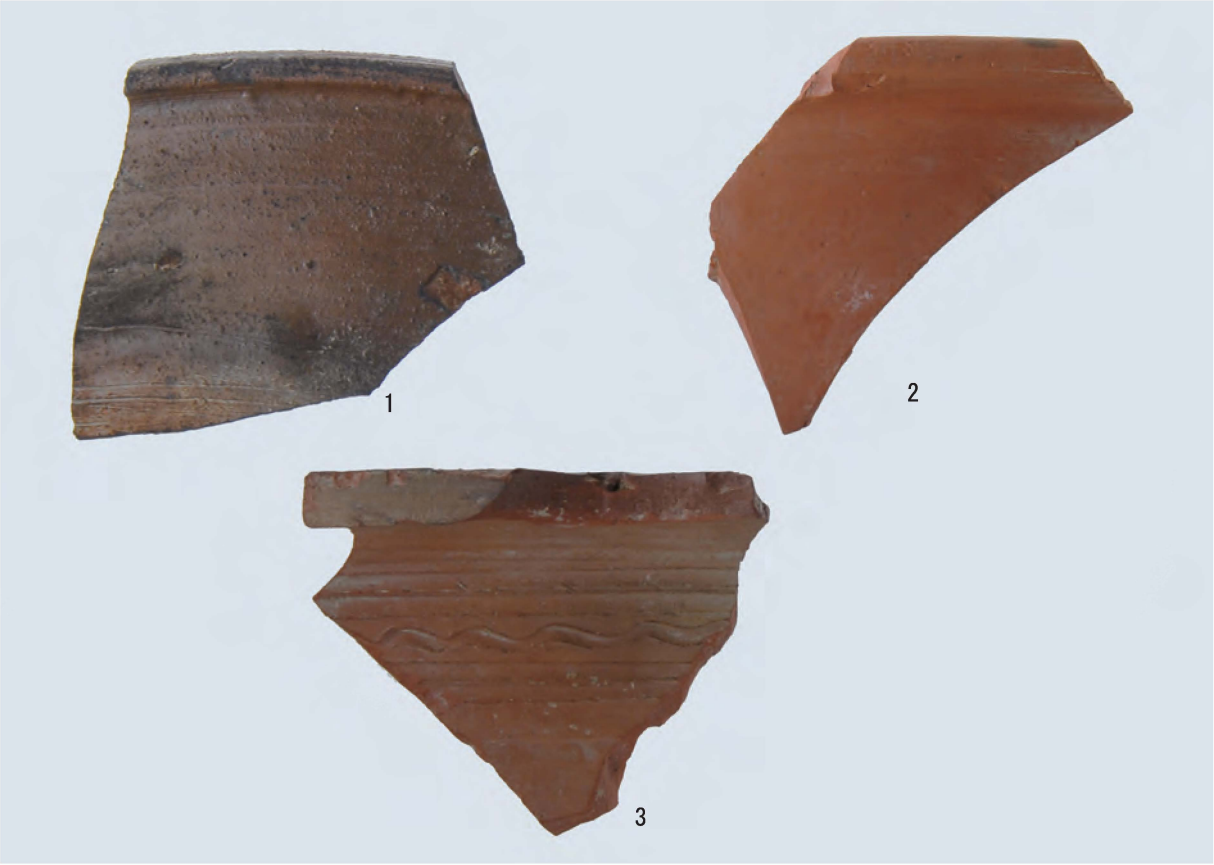


図版 6（第 9 図）　施釉陶器：鍋の蓋（1・2）、鍋（3 ～ 5）

図版 7（第 10 図）　施釉陶器：水注（1 ～ 3）、花瓶（4）



図版 8（第 11 図）　施釉陶器：煙管（1・2）、灯明皿（3）、灯明具（4）
炉（5）、香炉（6・7）



図版 9（第 12 図）　無釉陶器：鉢

図版 10（第 13 図）　無釉陶器：水鉢

図版 11（第 14 図）　無釉陶器：甕

図版 12（第 15 図）　無釉陶器：擂鉢

図版 13（第 16 図）　無釉陶器：皿

図版 14（第 17 図）　無釉陶器：水注（1）、片口（2）

図版 15（第 18 図）　無釉陶器：鉢（1）、徳利（2）、壺（3 ～ 6）

図版 16（第 19 図）　無釉陶器：蔵骨器（1）、蓋（2）、炉（3）、土錘（4）、陶製品（5）

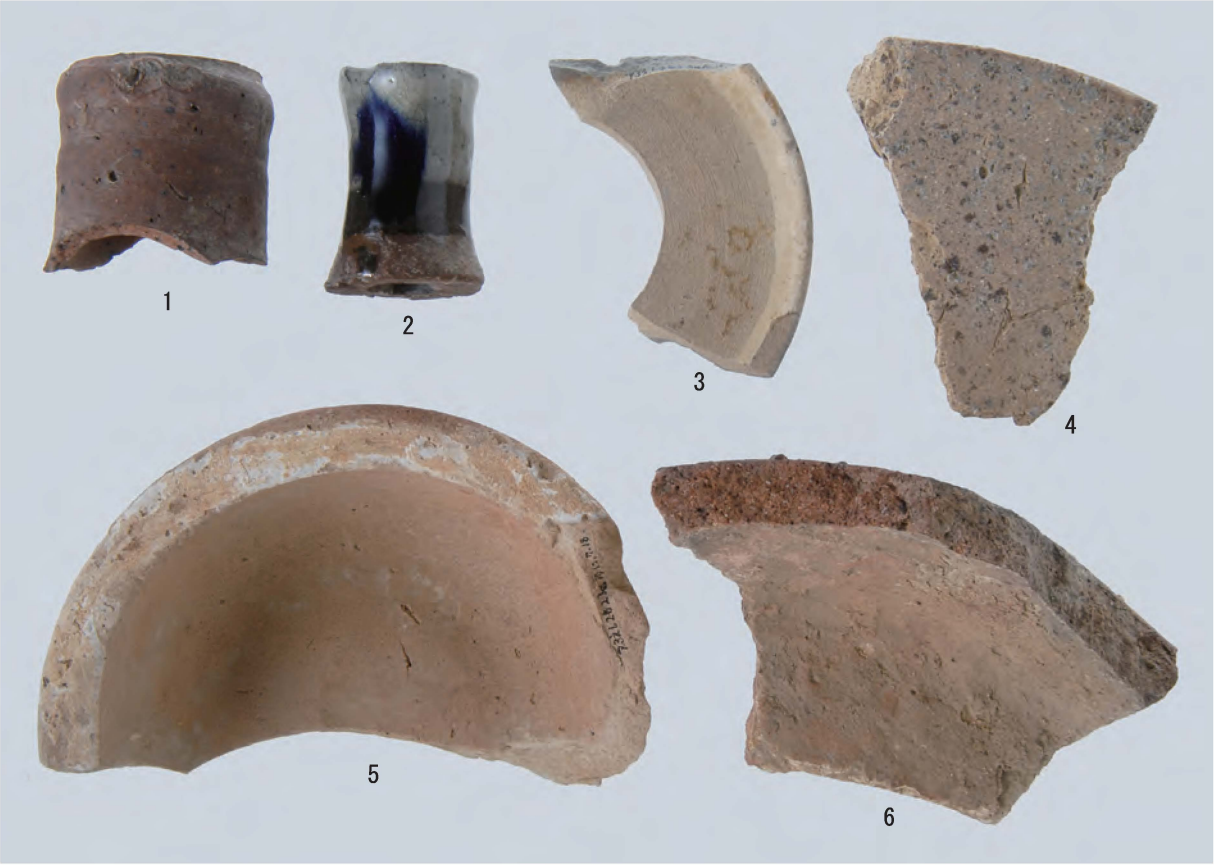
図版 17（第 20 図）　陶質土器：炉

図版 18（第 21 図）　陶質土器：鍋（5）、皿（6）、脚台付き皿（7）、蓋（8）
先島諸島の土器：底部（9）

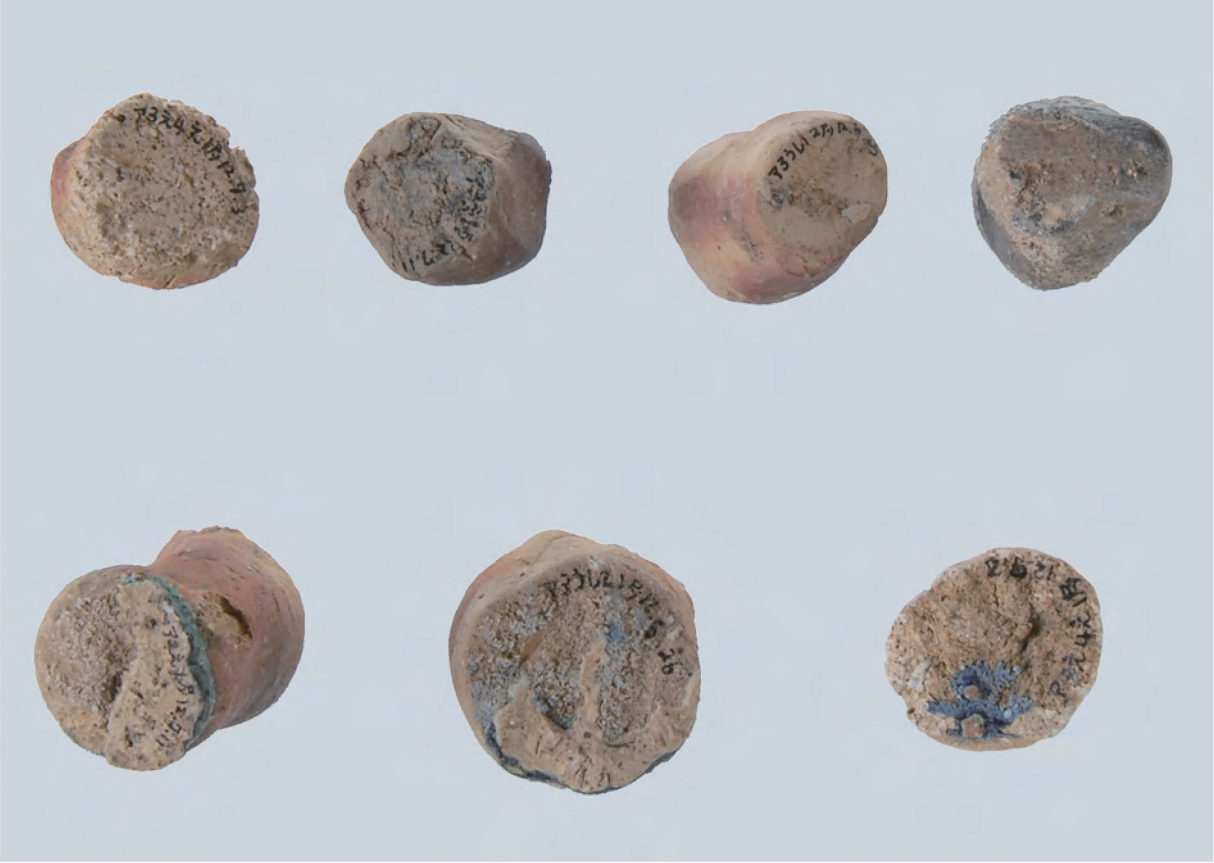
図版 19（第 22 図）　窯道具：円形ハマ

図版 20（第 23 図）　窯道具：抉り入りハマ

図版 21（第 24 図）　窯道具：筒状のトチン



図版 22（第 25 図）　窯道具：中空のトチン（1・2）、サヤ（3 ～ 6）



図版 23（第 26 図）　窯道具：円柱状製品

図版 24（第 27 図）　窯道具：中空のハマ（1）、桶胴形のハマ（2・3）

図版 25（第 28 図）　窯道具：タナイタ（1）、タナボウ（2 ～ 5）

図版 26（第 29 図）　瓦：丸瓦（1・2）、平瓦（3 ～ 8）

図版 28（第 31 図）　本土産陶器：擂鉢

那覇市文化財調査報告書第 101 集

壺屋古窯群Ⅴ

―新垣家住宅防災施設等事業に伴う東ヌ窯跡緊急発掘調査報告書―

発行　2015 年 3 月
那覇市市民文化部
〒 900-8585　那覇市泉崎 1 － 1 － 1
編集　那覇市市民文化部文化財課
TEL098-917-3501
印刷　企画印刷　ハーツ
〒 902-0071　沖縄県那覇市繁多川 3 丁目 13 － 8　1F
TEL098-835-3752